宮良橋と其水源の万年青岳
ヤクジヤマ蟹の三線彈くヒルギの林

珊瑚疊み作す五橋材
鶴葉千株短くして苔に似たり
是れ神仙の下り遊ぶ處なる莫らんや
萬年の青髻流れに映じ來る

と詠んだ萬年青岳は、此五枚橋の川上に遠く、萬古の愁の色は今も尙神祕に包まれて居るが、あの事件あつて以來、次第に島も今の世と爲つたと謂つて居る。それは最後の宮良のミヤラビが三人連で、夜深く石垣の村から戻つて來ると、之を戒告せんとして村の青年の群が、此橋の袂に待つて居た。それが怖ろしさに下流を徒渉しようとして、浪にさらはれて三人ながら溺れた。手を繋いだまゝ濱に死んで居たさうである。この悲慘な出來事が昔語となる頃には、島も淋しくなるだらう。花染手拭の色の褪せるやうに、詩人は老い歌は古くなつて行くだらう。併し此が爲に新しい力の日に豐かなるを恨むには及ばぬ。元來八重山の音樂には、世の始から悲調があつたのである。

二七　二一　色　人

ナビントウは路の右手の海際に、僅かの木杜を負うた崖の岩屋である。毎年六月穗利祭の二日目の暮方に、赤又黑又の二神は此洞から出て、宮良の今の村

の家を巡つてあるく。必ず月の無い夜頃を擇ぶことに爲つて居る。夜どほし村の中をあるいて、天明には又洞の奥に還つて行くと、次の日は村の男女が此に參詣する。佐事（さじ）と稱する六人の警固役が、杖を突いて其途に立つて居り、常々行ひの正しい者で無いと、何と言つても通ることを許さぬ。

宮良の人々は神の名を呼ぶことを憚つて、單にこれをニイルビトと謂つて居る。卽ち赤と黑と二色の人と云ふことであると謂ふが、ニイルは卽ち常世の國で、是も遠くより來る神の意であらう。此村の舊家の前盛（まへもり）某が、平日は神の裝束を嚴重に預かつて居る。木を削つて作つた怖ろしい面で、赤は黑よりも猶一段と怖ろしいさうだ。茅や草の葉を身に覆うて、人が此面を被ると云ふことだが、自分は信徒に對する敬意から、强ひて拜見を求めなかつた。實際新宮良の住民は、祭の日には人が神と爲ることをよく知りつゝ、而も人が神に扮するといふことは知らぬやうである。

此夕は家を清め香を燒いて、早くから神の來臨を待つて居る。二色人が前盛の家へ來て、謂ふ詞は一定して居るが、其他の家々では形式が色々ある。不幸の有つた者は慰める。無事の者は激勵する。さうして何れも次に來る年の、更にめでたく又豐かであることを、親切に且つ面白く、謂つて聞かせるのださうである。初春に吾々の門に來る春駒鳥追、其他種々の物吉ほぎ人と違ふ點は、單に家主が豫言者の前に跪いて、一句毎に丁寧に其受答へをするばかりでは無い。彼等は之を直接に神の御詞と信ずるが故に、如何な事が有つても村外の者に、其文句を知らしめぬ。是非とも之を聽かうとすると、うそを敎へるさうである。

しかも彼等の間に於ては、最も精確なる傳承が有る。村の青年の强健にして

品行正しい幾人かゞ、毎年新たに選ばれて祭の役を勤める爲に、其練習と準備をして居る。殊に赤又黑又は式の間一切酒食を口にせず、終夜踊り且つ歌ふ骨折の役であれば、兼ての精進も一通りで無いが、それが又男として此上も無い面目と考へられて居る。老人などの此祭を大切に思ふことも、殆ど想像を越えて居る。ゆかしいなつかしいと云ふ人間の感情の全部を、氏神に集注すると謂つても可い。夜も早東雲に近くなり、愈もとの洞に還らうとするのを見ては、又來年もおはしませと、落涙する者すらも尠なくは無いさうである。

宮良の二神は新城の島から、此村の前濱に上陸されたと云ふ昔話もある。併し此村は明和八年の大海嘯の後に、悉く小濱の島から移された民である。草分と呼ばるゝ前盛氏でも、第一世の仁屋が八十三歳で沒したのは、ほんの百年前の文政元年である。疑ひも無く故郷の島から持つて來た祭であつて、現に又其小濱にも新城にも、西表島の古見にも、此と同じ祭が今に行はれて居る。石垣島の方では川平と桴海の二村に、舊の八月又は九月の己亥の日、よく似た儀式があつて之を「まやの神」と名け、マヤとトモマヤの二神が出現する。マヤは方言に猫を意味する所から、普通は牡猫牝猫の面を被つて來ると謂ふが、舞にも詞にも猫らしい信仰は現れて居らぬ。阿檀の葉の蓑を着て、蒲葵で編んだ笠を深く被り、戸毎を巡つてやはり明年の祝言を述べる。其章句には農作の道を說くことが多く、沖繩本島のミセセリなどと共に、澤山の古い言語が、此中に保存せられて居るらしい。

吾々は無邪氣な童子等の口を假りて、せめては春の初には耳に快い祝福の言を聽かうとしたが、根本に於て既に絶るべきものを忘れた爲に、是も亦古臭い戲れごとと爲つてしまつて、正月は更に不安を新たにする。之に比べると沖の

小島は幸であつた。都鄙の區別を敎へる講師も國司も居なかつた故に、永く神の御幸の昔の悅ばしさを味はうことが出來た。さうして其神は又果知らぬ海原から、天に續いた地平線の向ふから、安々と其小舟を、島の渚には漕寄せることを得たのである。

二八　龜恩を知る

南々と謂つて居る中に、もう引返すべき汽船が入つて來た。石垣の端舟は帆ばかりが力で、只淺い灣内を右左にまぎつて行く。其間に見送りに出てくれた

岸の人は、一人づゝ還つてしまひ、海を曇らしむる雲の影ばかり、次第に多くなつて來る。晴れて水底に日の光のさし込む朝ならば、蒼白い砂地の處々に、深緑の珊瑚岩が二尋ぐらゐ迄は覗かれるのだが、けふは一圓に只淋しい灰色である。昔の大津浪の日の早天には、稍強い地震があつて潮は遠く退き去り、五彩の光眩き此海底の祕密が、悉く白日の下に露れたと云ふことだが、今はそれも喚び覺し難い夢のやうに感じられる。

本船に乘る迄に、もう天氣はすつかり惡く爲つて居た。此浪では今夜はとても出せませぬ。明日の又今頃迄斯うして繫つて居ますから、も一度此傳馬で上陸なされては如何と言つて來たが、大抵の客は舌打ちなどをするばかりで、或は傳言を賴んだり、刻煙草を取寄せたり、碁盤を借りたりして、還つて見ようとは言はなかつた。眼の前に毎日見て居ながら、終に渡つて見ることを得なか

つた竹富の島は、砂濱以外に何物も無いかのやうに、寂寞として船の右手に横はつて居る。もう今夜は月も遲い。それに濕つた風が甲板を吹いて、永く立つて別を惜むことも出來なかつた。

萬年青（おもと）は千古の靈山であつて、今も尋常の旅人には、只遙かに山の姿を仰ぐことを許して居る。而もその裾野の南の一角が、殆ど全部の八重山文明の舞臺で、其尖端の最も低い臺地に據つて、石垣四箇の邑落は在るのである。ケビンの窓の圓硝子越しに、折々首を擧げて覗いて見ると、船は搖くとも思はれないで、干瀨に續いた陸地の一文字が、譬へばアイヌの髭箸の如くに、上へ下へと動いて居る。此があの莫大な戀歌の國、利害と人情との無暗に錯綜した、泣いたり怒つたりの浮世なのか。何だあ、かりがたつた七つしか見えない。僅かな者が餘分に利巧なばかりに、此島も常に苦勞をして居る。さうして不必要に早く

老いて居る。

只些しく世間を知つた不幸ほど、始末の惡いものは無い。もう此社會には新しい不思議が現れて、人の心の向き方を變へるやうな、機會はまあ無いものと思つた。處が人間界にはまだ見盡されぬ隈があつた。自分等より二船ほどおくれて、前の富士屋旅館の女主が、八重山から引き揚げて來てこんな話をした。

虛誕だと思ひなはるなら、思ひなはつても仕方がありませんが、私が船に乘りますと、大きな龜が三つで、送つて來てくれましたよ。

みんなが一所に見たのですから、今度誰にでも聞いて御覽なさい。役所の人達や女たちも、同じ傳馬で賑やかに送つて來てくれました。おいおかみ、僕等こそ斯うやつて見送りをするが、あれ程助けて置いた龜はどうだい。どうぞ御無事でとも何とも言つて來ないぢや無いか。だから詰らぬ事なんだと、言つた

か言はぬかに舳先の方に乘つて居た誰かど、あつ龜が出たと大きな聲で申しました。私が見たときにはもう二番目のが、斯うやつて手を動かして船のすぐ脇を通りました。それから又一つ今度は少し小さいのが、背中を出す位にして蒸汽に乘る時まで附いて來ましたと謂つた。

是には蒼くなつて驚かぬ者は無かつたさうである。ちやうと自分が淋しく別れて來たあの海だ。常は海龜などの入つて遊ぶ場所でも無い。卵を產む季節だけは、この近くの濱にも上つて來て捕られるのを、土地の漁師は料理して肉を賣つて居た。其を助けて放すやうに爲つてから、何時でも絲滿(いとまん)が先づ富士屋へ擔いで來た。門から中へ擔ぎ込んだからは、値が高からうが安からうが、買はずに返したことは無かつたさうだ。其爲に三年あまり、一枚だつても新しい衣類は、こしらへたことがありませんと謂つて居る。

何でうそだと思ふものかおかみさん。おかみさんは寒國の人だから知るまいが、日本の大海にもそんな龜が昔は居たのだ。浦島でも山蔭の中納言でも、氣を長くして居た爲に、ずつと立派な答禮を受けて居る。おかみさんが女の癖に鐵砲をかついで、島で鳥打などをしてあるきながら、龜だけは性(しやう)の有るものと思つて助けたくなつたのも、又內地の町の年寄たちが、小さな石龜でも放さうかと思ふのも、誰も知らない不思議の遺傳が有るからで、其が又暖かな南の海で無ければ、最初から經驗することの出來なかつたことなのだ。我々がとうの昔に忘れてしまつたことを、八重山の人たちは今ちやうど忘れようとして居るのだ。

二九　南波照間

西常央翁から聽いたと、南島探險記には書いてある。波照間の島は卽ちハテウルマで、うるまの島々の南の果の、意味であらうと云ふことだ。なるほど氣を付けて見ると、八重山郡の東の海には多良間あがり、宮古群島には來間島あり、沖繩の西南に近く慶良間があり、更に大島に續いて佳計呂麻の島がある。南北三つのエラブ島も其轉訛かもしれぬ。語尾のよく似た島の名が、此ほど迄多いのは偶然ではあるまい。或は曾て島をウルマと呼ぶ人民が、爰にもやまとの海邊にも多く榮えて居て、自然に都の歌や物語にも、ウルマの島の人なれやなどゝ、口ずさまれるやうに爲つたのでは無いか。さうで無くても昔なつかしい語である。

波照間島は石垣から西南、猶十一里餘の海上に孤立して居る。此から先は只茫々たる太平洋で、强ひて隣と謂へば臺灣が有るばかりだが、しかも玆へ來れば更に又、バェバトローの島を談ずるさうである。バエは南のことで、我々が南風をハエと呼ぶに同じく、バトローは卽ち波照間の今の土音である。この波照間の南の沖に今一つ、稅吏の未だ知つて居らぬ極樂の島が、浪に隱れてあるものと、かの島の人は信じて居た。

昔百姓の年貢が堪へ難く重かつた時、此島の屋久のヤクアカマリと云ふ者、之を濟はんと思ひ立つて、遍く洋中を漕ぎ求めて終に其島を見出し、我島に因んで之を南波照間と名づけたと傳へて居る。徐福が大帝の命を承けたのとは事かはり、此は深夜に數十人の老幼男女を船に乘せて、竊かにその漂渺の邦へ移住してしまつた。其折に只一人の女が、家に鍋を忘れて取りに戻つて居る間に

夜が明けかゝつたので其船は出去つた。鍋搔と云ふ地は其故跡と云ふことに爲つて居る。取殘されて歎き悶へ足摺し、濱の眞砂を鍋で搔き散らした處と謂ふのである。

新たな島を求めんとする心は、人の世中が住みうくなる更に以前から、久しく島人の間には傳はつて居たものだらう。さうで無ければ大古の時から、既に此世は住みうい處であつたのか。兎に角にどの海のどの小島にも、人が渡つてもう住んで居る。島は盡きても求める心は絶えなかつた。獨り北の波照間のみでは無い。沖繩でも南に大海を望む具志頭村の銀河原に、俊寛僧都同系の悲慘な話が有つて、磨小塘の遺跡は亦南の果の島の鍋搔に對して居る。昔此里に住む夫婦の者、家計の不如意を愁ひて居る折柄、一人ある僕、釣に出でゝ颶風に遭ひ、珍らしい島に上つて數月を過した後、或日南の風に乘じて還つて來た。

こんな結構な島があります、御伴をして參りましようと、五穀の種や色々の道具と共に、既に女房をも乘せ了つてから、僞つて主人に向つて、石臼を持て來てくれよと賴んだ。主人は急ぎ戻つて臼を持つて出て見ると、もう其小舟は沖中に漕ぎ出して居て、追付くことも出來なかつた。女房は涙の聲を張揚げ、惡い僕に騙されて、私ばかり斯うして連れて行かれる。聞けばあの島には大きな蘆が茂つてゐるさうな。其蘆の莖を採つて本を切り末を切り、海に流したのが此濱に流れ着くならば、私はまだ生きて居ると思つて下さい。其が來ぬやうに爲つたら、死んだと思つて下さいと、泣いて約束をして汐路遠く往つてしまつた。亭主は只ぼんやりとして臼を此水中に投込み、還つて來たと云ふのはしようも無い話だ。

併し此話は又一方に、今昔物語の土佐の妹脊島の話に似た所がある。船で田

植に行く幡多郡の海岸の農夫、苗と兄妹の子供とを船に乗せ、一寸家に戻つて居るうちに風が吹いて、船は沖に出てしまつた。二人ばかり其島に漂着して、せん方も無く其苗を植ゑて、後に同胞で夫婦に爲つたと謂ふのである。臺灣の生蕃には殆ど各蕃社毎に、之に似た兄妹漂流の事件を以て、部落の始とする口碑がある。神の怒りの大水で、臼に乘つて居た二人の外は皆死んだ。其臼の隅に挾まつて居た穀物の種を播いて　新たに次の世の親と爲つたと傳へて居るのである。

波照間島の人類の始も、やはり亦災後の兄妹で、神の惠に依つて子孫を儲けた。但し爰では大水の代りに火の雨が降り、臼の代りに白金の鍋を以て、身を覆うて免れたと語り傳へる。臼も鍋も要するに皆、ノアの箱舟に他ならぬ。時の大海原を如何なる風に乘つて、その箱舟の物語が、廣く遠く西東には吹分れたのであらうか。今ではもう具志頭の濱に、蘆の莖も流れて來ず、有名な與那國の大草鞋も、誰が何の爲に流したかゞ不明に爲つた。併し此等の物語は、決して其全部が夢では無い。石垣島では波照間島のヤクアマカリに該當する英傑を、本宮良（もとみやら）と謂つて今も深く慕つて居る。卽ち慶長の南蠻船漂着の頃に、切支丹の故を以て刑せられたと云ふ人である。本宮良が自在に海上を去來して、さき〴〵で妻を持つて居たと云ふ、島々の名は何人も知らぬが、彼が携へ還つた葉の紫な南蠻萬年青（なんばんおもと）だけは、今も尙此島人の庭や石垣に、日に照つて美しく榮えて居る。

與那國の女たち

一

石垣島では與那國(よなぐに)のことを、ユノーンと呼んで居る。かの島の人々は、自らヅナーンと謂ふさうである。同じ八重山郡の内ながら、石垣からは何れの岡に登つても、與那の國の島の姿を見ることが出來ぬ。西表(いりおもて)の高い島山が、中を隔てゝ居るからである。さうして海上が五十幾里、冬は殊に浪が荒いと云ふが、それでも折々はあちらの船が、前觸れも無しに鳥などのやうにやつて來る。それに又便船すべく行く人や還る人が、もう來さうなものだと謂つて待つて居る。

自分の石垣島に上陸した日の午後にも、ちやうど一艘の朝來た船が還るので、旅館の主人の石本氏は、急に支度をして乘つて往つた。此人は數年前に上方から來て、島々の間で商賣をして居る。留守を預かる帳場の男は鹿兒島の者、其外に那覇から來た少年と、臺灣の打狗で生れてまだ内地を知らぬやまとの娘とが働いて居る。それだけでも既に珍しい取合せであるのに、若い美しいおかみさん、卽ち土地で刀自と稱する婦人は、與那國の生れであつた。刀自の名はクヤマ、髮かたちは島風であるが、「いらつしやる」を精確に使ひ得るほどに、内地の語には通じて居る。

二

この若いクヤマを訪ねて、一人二人の與那國の女性が、夜分などに來ては物靜かに話をして居る。今朝の船で著いたと云ふ者も居たが、自分たちとは違つて少しも旅人らしい樣子は無く、まるで隣家の人のやうに落付いて居る。

二十七八の小柄の、子供のやうな口元をした女は、この石垣村の小實業家の某と云ふ人の、與那國の刀自であつた。某君が病氣になつて、とんとあの島へも往かれぬやうになつてから、一年に二度か三度、斯うして向ふから渡つて來ては、ゆつくりと遊んで還る。年は若いが手に入墨をちやんとして居る。北の方の島々の黥とは又形式が變つて居るらしいので、よく見て置かうと思つて眼を著けると、之をすぐに覺つて頻りと左右の手を揉み合せ、私などは昔者だから、ヤマトウシュメーはをかしいだらうと、傍の人を向いて言つて居る。それでも根氣よく賴んで居るうちに、かなり高い聲を揚げてションガネ節を歌つてくれた。さうして其歌の文句に表れた島の情合ひを、說明して聞かせようと力

めてくれた。

今一人、どうしても歌つてきかせようとせぬ婦人が居た。年は又七八つも上であらうのに、此方は手に入墨をして居なかつた。行政廳が針突の風習を制止したのが、明治三十一二年の事と謂ふから、此年齢の女ならば、して居らぬ方が當りまへである。それに家柄なども稍良い方であるらしかつた。與那國では苗字よりも屋號の方が、普通に行はれて居ることは沖繩の農村と同樣で、家毎に尙一種の記號のやうな繪をもつて居る。それを集めた帳面を、自分が取出して見せると、皆で寄つて來て其中から、是が此人の家の符牒だ、これは其本家で、他所から來る人のよく泊めてもらふ家だなどゝ一つ殘らずに知つて居た。此婦人は只一人ある男の子を、那覇の中學校に入れる爲に、試驗を受けさせに石垣へ來たのであつた。首尾よく試驗が通れば沖繩まで自分が附いて行く。與

那國の島ではこれで三人目とかであると謂ふ。又親類には醫者の免狀を取つて、島に還つて開業をして居る者もある。其人の刀自は香川縣の生れであるとも謂つた。さすれば所謂女護の島にも、既にやまとの女性が來て住んで居るのである。他の島々と特に變つたことは無いのである。

三

首里や那覇でも內地と一樣に、與那國に就ては徒らに奇拔な評判ばかり高いが、自分の聽いて見た所では、實は爰も新しい日本國の一島で、弱い者が餘分の苦みをすると云ふ以外に、何も特殊の社會組織が有るわけでは無いやうだ。唯、やまとなどに比べると今一般と、歷史が新しく昔が近い爲に、まだゴンボウを大切にする風が、少し殘つて居ると云ふばかりである。ゴンボウとは何であ

るか。はつきりとした意味は、自分にも説明し難いが、少なくとも與那國の島では、島人を父とせずに生れた子を、さう呼んで居るのである。那覇の色町などでは、只の浮氣と云ふ意味に此語を用ゐて居るらしいが、多分はもと假の妻と云ふやうな心持であつたのが、轉じてさうして生れた兒の名にもなつたのであらう。

與那國には限らず、近い昔までは琉球の島々では、在番役人の子を產めば、平民が士族に爲つた。さうして士族には經濟上の特權があつた。それ故に最初から、或時期限りの刀自なることを承知の上で、滯在の人にかしづくことを厭はなかつた。今はもう其樣な誘因が、勿論何も無いのであるが、生活は至つて簡易なり、女は如何なる境遇に在つても働きさへすれば生きられる故に、やはり安心して色々の子を育てるのである。わざ〳〵ゴンボウを產ませる爲に、此島に渡つて來る人は有る筈が無いのだが、海が荒れたり用事が片付かなかつたり、今も昔の如く圖らざる永逗留をするうちに、自然は此の如き大きな仕事をしてしまふのである。島の現在の有力者は、何だか大部分はゴンボウの子孫であるやうに、自分に話した人もあつた。そんな理由は無からうと思ふが、兎に角に外部から、何の攪亂をも受けなかつた家の血が、平和なれども又平凡に流れ易い、傾きはあつたかも知れぬ。それだけは殆ど何れの離れ島でも、免れ難い通勢であつて、たゞ島が小さいほど、其結果が早く見えるのかも知れぬ。

現在此島で指折りの物持の中に一人の婦人が有る。噂によればずつと以前の駐在巡査の刀自であつた。別離に臨んで幾人かの子供と共に、若干の金子を其母の手に遺して來た。其高は何れ莫大では無かつたに相違無いが、島には現金の入用が無暗に多く、而も人は皆義理が固い爲に、少しの危險も無しに其元金

が次第に成長した。目前に斯う云ふ生活の例があるに由つて、旅の人をゆかしがる氣風が今に止まぬのであると云ふ。ところがをかしいことには、此噂を自分にして聽かせた男も、やはり第二の噂に依れば、此島に七歳ばかりの落胤があつて、若干の金を其母に殘して、間も無く遠方へ云つてしまつたと云ふことであつた。

四

沖繩の文人の先島情調を說く者は、必ず其例としてウヤンマーの一曲を擧げるが、八重山は歌の國だと云ふ世評を悅ぶ島の人にも、之を以て彼等の音樂を代表せしめることだけは絕對に承認しない。ウヤンマーのアンマーの阿母加奈之などの阿母と同じく地位ある婦人のこと、ウヤは親方親雲上などの親と同じく、つまりは令夫人とも譯すべき沖繩の語であつて、チェムバレンが琉球語研究の附錄には其全譯を載せて、此語をマイレディと譯して居る。任期三年の八重山在番が、船出に臨んで假の妹脊の永い別を悲み、頑是無い稚兒に取縋られて涙の袖をしぼると云ふ、至つて單純な趣向であるが、歌の章句には南國のペソスが有る。而も八重山人の言に從へば、第一ウヤンマーは此方の語で無い。石垣でならばカリヤヌアンマと謂はねばならぬ。假屋は卽ち在番の官舍のことである。第二には、このチョーギン(狂言)の中の歌がまがひ物で、中にたゞ二つの本の歌も、元來石垣首邑の藏元の歌で無く、何れも與那國のションガネ節であり、而も與那國には沖繩の官吏は在勤しなかつたから、乃ち別人の爲に發した愛慕の聲であつたのを、史實に反して橫取りしたのが不服なのである。

いとま乞ひともて(思ひて)

持ちゆる盃や
目なだ(涙)泡もらち
飲みのならぬ

是がその問題の歌の一つである。更に今一つの歌は、

片帆持たしば
片目のなだ(涙)落し
もろ帆持たしば
もろ目のなだ落し

と云ふのであるが、自分も現に與那國の女が、之を歌ふのを聽いたのだから、證人に立たざるを得ない。しかも此の如き剽窃は寧ろ孤島の面目であつて、淋しい島の女の無始の昔からの哀愁が、弘く世上の歌を好む人々をして、胸躍り

袂沾はしめたのは嬉しいことゝ思ふ。殊には日本の果の果の島まで、曾て大に都市ではやり、北は奥州の「さんさ時雨」の曲となつて傳はつた「しよんがえ」の歌の節が、一度は爰まで運ばれて更に又、沖縄の湊町に戻つて來たことをなつかしく感ずる。薩摩の海門に於ても久しく土地の名物として同じ鄙ぶりがもてはやされ、「雲の帶してなよ〳〵と」ゝ云ふ歌は多くの人が聽いて知つて居る。沖縄近海の船歌にも今もチョンガェと云ふ囃子がある。海の荒し子どもはいつの世にか、遙々と之を携へて與那國を訪ひ、今歌ふ少女の曾祖母あたりを、慰め又悲しましめて居たのである。

海を眺めて居る與那國の女たち

五

所謂假屋のアンマの生活は、昔は殆ど島毎にあつたものらしい。島の平民の娘にして、眉目清らに生れた者は、必ず何人かゞ勸めて化粧させ新しい衣を著せて、目に立つ場處で布を織りつゝ新任の官吏に見えしめた。狂言のウヤンマーの如く男の兒を儲けて、幸福な士族の家の先祖と爲つた者もあれば、不幸にして老人にかしづき、後に淋しく別れてしまふ者もあつたさうだ。與那國などの遠い島では、與人と目差と二人の役人が、藏元卽ち首邑の石垣島からやつて來て、やはり沖繩と同じ方法で、其在任期間の刀自を選定した。從つて島の女の別離の歌曲には、彼等の眞情から出たものもあれば、又音樂を愛する青年官吏から、强ひて此の如く歌はしめられたものもあるだらう。其人々は男も女も皆

死に去つて、今では歌だけが前の歴史を語つて居る。强い者が曾て勝つたと云ふ、さびしい歴史を語つて居る。

與那國では平家の一族の末と云ふ部落があつて、今尙在來の島人の子孫たちと對立し、平和の競爭を續けて居ると言つた人があるが、果してさうであらうか。平家は北に四百里を隔てた南九州の山村から、島では川邊の十島を始として、どこへも上陸して遺蹟を留めて居る。モリは社地又は靈山を意味する普通名詞であるが、之を祭る島では悉く、行の盛友の盛などの神歌を存し、更に系圖が出來後裔が榮えて、之を否認すれば決鬪を申込まれる。海は一續きであるから壇の浦の船の數だけは、落人の漂著した例も有り得るのであるが、實は其後の六七百年も、彼等をして優美なる由緒を保存せしめる程に、島の生活は無事單調では無かつた。たとへば石垣島に在つては、赤蜂本瓦が井底の痴蛙であつた

爲に、宮古の仲宗根豐見親は、沖繩の船軍を嚮導して此島に攻入り、各村の舊住民を征御して之を只の百姓にしてしまつた。卽ち石垣のユカルピト（優越階級）は、少なくとも其血の三分の二まで宮古系になつたのである。之に反して與那國の島では、宮古出身と傳ふる酋長の鬼虎が、あまりに暴虐を振舞つた爲に、終に石垣からの遠征を受けて、忽ち全村の屈服となつてしまつた。其以前にも西表島の祖納堂と云ふ一勇士が、單に此島を發見したと云ふ理由のみで、攻めて來て占領した事實がある。慶田城の村に今もある祖納堂の家の火神は、それから以後與那國の船人等が、來ては拜んで行くことになつて居るのは、恐くは此家の支系が、永く與那國の島に土著したこと、恰も宮古の勇士の末が、八重山の士族になつたのと、同じであることを意味するのであらう。石垣の村にも亦與那國のオーン（御嶽）と稱して、かの島の島人だけが詣つては香を燒く靈地が、濱近くの人家の間に在つて、村では却つて之を顧みる者も無いのは、移つて後に本家が絕えて、子孫があちらにばかり有る爲であらう。近くは明和の大海嘯、それに引續いての疫病流行で、石垣本島の人口は一時四分の一に減少した。其時は命令を以て附近の島々から、無理に若干の民を此方へ移住せしめ、南に面した海岸の村々は、殆ど皆昔を知らぬ者ばかりが、廢墟の土を耕して居るのである。此以外にも次第に死に絕えたり、强ひて連れて行かれたり、人が乏しい爲に不自然なる婚姻もあれば、家の盛衰も亦異常であつた。斯うした永い年月の交通往來を重ねて居るうちに、人の血は愈混淆して、恨んだ者も恨まれた者も、たゞ忘却の一體となつてしまつたこと、恰もこの漫々たる大海の波濤の如く、永古に殘るものとては、獨り底知れぬ潮の力のみであつた。

與那國の女たちは、ほんの無邪氣な心持で、島の話をしたのであつたが、靜

かに聽いて居ると幾らでも悲しくなる。生きると云ふことは全く大事業だ。あらゆる物が此爲には犧牲に供せられる。而も人には美しく生きようとする願が常に在つた。苦惱せざるを得ないでは無いか。

六

なか〳〵樂では無い島の生活ださうである。水は幸にして清い谷川が流れ、宮古のやうに降川（おりかは）を登り降る煩ひは無いが、如何にも風の強い島であつて、稻の實にならぬ年が何年も續いたことがある。阿檀（あだん）の芽だけは石垣でも食べると謂ふが、與那國では蒲葵（くば）の木の芽も食べておいしいと謂ふ。蒲葵の實も此島では食べる。海からも少しづゝ食物を惠まれる。たゞ困ることは金に代へるやうな生產品が少ないのに、外から買はねばならぬ貨物が時世と共に增して來ることである。豚でも鷄でも世間の相場を知らぬ爲に、折角繁殖させてから、まるで目算の違つた取引をするやうなことが折々ある。斯う云ふ境涯に於て、女などが外へ出て住みたがるのは無理で無い。殊に此島の婦人には强い所がある。甲乙の組合を分けて競爭させると、道造りなどには篝を燒いて徹夜に働くこともある。運動會の催される日には、旗を立てゝ男たちを迎へに來る。役場にもめ事でもあつて、村の男の押掛けて來るときには、垣根の外は此に聲援する婦人で一杯になるぐらゐであると謂ふ。もつと南の方の島々の、女の地位風習などゝ考へ合せると、どうして又此樣な、きつい氣性が根ざしたも

米を搗く與那國の女

與那國の女たち

のか。はた又此が將來にどう云ふ運命を開いて行くものか。自分などにはとても判斷をすることが六かしい。

此島の風俗の中には、他の沖繩の諸島を中に置いて、始めて葦原の中つ國と、根原が一つであることを知るもの多いやうに思ふ。例へば門の口に文字の無い石敢當を建てる風、式日や葬祭の日に猪を屠る風などは、何れも大琉球の同情を透して見ないと、見馴れぬ我々にはあまりに異樣に感ぜられる。言語に於ても亦其通りで、不意に行逢うては本の由緣を心付かぬ程に、我々の常の話とはかはつて居る。是皆久しい間、島と島とが母の交通を、杜絶して居た結果である。我々は曾て大昔に小船に乘つて、この亞細亞の東端の海島に、入込んだ者なることを知るのみで、北から次第に南の方へ下つたか、はた又反對に南から北へ歸る燕の路を遂うて來たものか、今尙民族の持ち傳へた生活樣式から、も一つ以前の居住地を推測する學問が進まぬ爲に、如何なる憶斷でも成立ち得るやうであるが、少なくとも此等の沖の小島の生活を觀ると、それは寧ろ物の始の形に近く、世の終の姿とはどうしても思はれぬ。卽ち大小數百の日本島の住民が、最初は一家一部落であつたとする場合に、與那國人の今日の風習が、小島に窄んだから斯うなつたと見るよりも、やまとの我々が大きな島に渡つた結果、今日の狀態にまで發展したと見る方が、遙かに理由を說明しやすいやうに思はれる。北で溢れて押出されたとするには、平家の落人でも無い限は、こんな海の果までは來さうにも無いが、南の島に先づ上陸したとすれば、永くは居られぬからどうかして出て來たであらう。さうして取殘された前の島の人を必ずしも屢〻想ひ出すことは無かつたかも知れぬ。假に此推測が當つて居たとすれば、我々は誠に偶然の機會に由つて、遠い昔の世の人の苦悶を、僅かながらも此あ

たりの島から、見出し得たことになるのである。

先島各地ではつひ近い頃まで、何か仔細が有つてか沖繩本島のことを、惡鬼納の三字を以て書現して居た。士族に取つてはその惡鬼納への渡海が、戰陣にも相當する苦しい役であつた。王命とあれば唐へも大和へも行き向うたが、三つに一つは其船が還らなかつた。たま〳〵漂流して生き

與那國島の母と子
白い着衣はクミヤー、本州の千早に似たり

て戻つた者に、怖ろしい異國の島の話があつた。與那國の人達はもう忘れたかと思ふが、毎年一度一丈二丈の大草鞋を作つて、海に流して外敵を畏嚇したと謂ひ、或は之と反對にそんな物が、何處からとも無く流れて來たとも傳へられた。斯うして五里三里の小さな孤島に閉ぢ籠り、限りある平和を樂しんだ時も永かつた。荒海は誠に堅固なる障壁であつて、之を守つて居れば外界の幸福と比較して、徒らに憂へ憤るべき場合も起らぬ筈であつたが、悲しい哉不老不死の藥は、島の内では求め得られなかつた。徐福の船は又新たに、出でゝ蓬萊の島を求めねばならぬやうになつた。空しく待つ者と終に還らぬ者とに、島の民は再び二分せられんとして居る。

七

民族古來の悠久の足跡は、とてももう分らぬ問題として置いて、自分は尙五十里を隔てた、與那國を知らうとしてあるいて見た。庭に佛桑花(ぶつさうげ)の紅く咲く家に、まだ一人の與那國の女が居た。其名をナサーと謂つて不幸なるゴンボウの

孤兒であつた。五つの年から母の島へは還つたことが無い。成長の後にある男に連れられて、與那國に住むつもりで渡つて往つたが、刑事事件が起つて又其船で男は引戻され、自分も終に獨り止まつて居ることが出來ぬので、石垣まで歸つて元のしどけ無い生存を繰返して居る。よく歌ひよく飲む妙な女だと云ふことを、幾度か土地の人から聞いただけで、自分は其以上の事を知る機會を得なかつた。

又一人の亞米利加へ往つて來た女がある。マクダ部落の貧しい家の外に、高く細い木の臼で、漆喰にする土をこつ〳〵と搗いて居た。あれがヴァンクーバーと謂ふ女です。與那國の者です。一つ此方を向かせて見ましようかと言つて、親切な案内者がホーイと甲高い聲で喚んでくれたが、早くから知つて居たか、振向きもせねば頰の肉も動かさなかつた。物ごしはすらりと上品な女であつたが、如何にも氣の毒な惡いきものを著て居る。歸つて來た當座には靴もあり帽子もあり、仕事着と云ふ洋服も持つて居たが、二三年の内に追々破れてしまつたさうである。是は亭主に棄てられて戻つて來たと云ふばかりで、最初からよく無い經歴の女では無かつた。それに年も若くて美しかつた。親類の者がたびたび與那國へ還るやうにと來ては勸めるが、何としても之に從はぬのは意地であらう。今ではこの石垣島の生活にも倦んで居る。こんな位ならば何をしてなりとも、カナダに殘つて居たものをと、折々は歎息するさうである。さうして是が後にはどうなつてしまふものか。やはり今までの多くの島の婦人の如く、早くしようも無く老いてしまふのでは無からうか。子を持たぬと云ふ不幸は、島に於ては殊に堪へ難いものゝやうに思はれた。

南の島の清水

むかし手にくだる、なさきから出ぢて、なまに流れゆる、ちゆ田の手水　（金武節）

昔手に汲だす、いつの代がやたら、水やなままでむ、澄みてなすが　（同　上）

一

沖縄では組踊の「手水（てみづ）の縁」が、めつたに興行を許されぬやうになつても、晴れて日の照る日に許田（きよだ）の入江の村を通る者は、一人として昔其泉の側に於て、清水を手に掬して若き旅人に飲ましめたと云ふ美しい少女を、想ひ出さぬものは無いであらう。際限も無く古い親々の代から、一つ物語がしば〳〵其形を變

じて常に清新に、幽艶の調は流れて永く絶えざること、恰も此里の泉の水のやうであつたのは、是にも亦二つの源頭が有るからである。其一つは卽ち清水を戀慕ふ島人の心もち、其二はどこ迄も泉に纏綿した、村の女性の生活に他ならぬ。自分は前にも諸國の姥が井の由來について、少しく此間の消息を說かうと試みたことがあつたが、今度は又南の島を旅行して、もう一ぺん誰かと此話がして見たくなつた。併し問題は込入つて居り、私は中々忙しい。うまく簡單に說くことが出來ればよいがと思ふ。

二

平和の綠の色に一樣に取包まれた沖繩の村々も、水の一點だけには著しい幸不幸がある。概して言へば新しい村ほど、飲水の不自由を辛抱せねばならなんだやうである。那覇なども隨分古い湊であるが、當初今日ほどの繁榮を豫期しなかつた爲に、近く良い井戸の在る家は誠に少なく、他の多くは入江の對岸のウチンダ（落平）の泉から、遙々と汲んで來て用ゐて居る。町を貫く堀川に潮が滿ちて、翡翠の往來が次第に稀になる頃、ぎいと梶の音をさせて入つて來るのは、すべて水賣の船である。酒屋の庫にあるやうな大桶に幾つも汲入れて、家家に水を配つてまはるのである。又漆喰をよくした町屋の赤瓦は、その第二の目的として是で雨水を受留める。其末をタンクに貯へて、お茶の水にまで使つて居る家がある。

郊外に出て見ると庭の木に斜めに繩を張つて、壺に僅かの雨の雫を集めようとした家もある。瓦葺きの多く無かつた時代には、是が最も普通の方法であつたらしい。八重山の石垣島などでも、私の見たのは福木の幹に一枚の棕櫚の葉

を結びつけ、一尺ほど切殘した葉柄の端から、樹下の小瓶へ雨水の滴るやうにしてあつた。先島は一帶に水が十分で無くて、島布なども多くは海の水を以て洒して居るのである。

三

井戸をカハと謂ふのは、必ずしも沖繩の諸島だけでは無い。九州でも弘く之をヰカハと呼んで居て、飲水の供給が最初は皆天然の流からであつたことゝ、其流を堰き留めて水を一處に止住せしめたのが、卽ちヰと云ふ語の起原なることを示して居る。やまとの島で普通に見る掘り井戸を、宮古でも八重山でもツリカーと稱へて居る。釣瓶を以て水を釣る井戸の意味で、その釣瓶は蒲葵（くば）の葉を以て、巧みに鸚鵡貝のやうな形に縫うてある。大事に使へば一つが十日餘り

も持つと謂ふ。此頃は葉鐵（ぶりき）で作つた同じ形の釣瓶も出來たが、元の蒲葵で製したものは輕過ぎて、使ひ馴れぬ者にはとても水が揚らぬ。其ばかりか深い釣井（つりかは）でも、水は幾らも無くて折々は新たに湧くのを待たねばならぬことがある。斯う云ふ井戸へ村中から、汲みに通ふ者は他の多くの民族と同じく、悉く村の女たちであつた。ツリカーに比べるとウリカーの方が更に苦しい。ウリカーは卽ち降りて汲む井戸のことで、宮古の平良（ひらら）などには此ばかりしか無いやうである。それも舊記には十箇處と記したものが、中にはもう丸で出なくなつたのもあれば、洗濯にしか用ゐられぬ濁り水もある。ほんの人家の片脇などに、追々に掘り窪めて九丈十丈と斜に降りて行く險しい石坂を、石の稜が滑かになるまで、毎日上下して僅かの水を頭に載せて來る。それが昔から皆女であつた。中世島と島との怖しい戰の時、八重山の島から捕はれて來て、深く危ふいスサカガー

（白明井）の水を汲みに、日毎に追ひ遣られた美しい娘が、身の薄運を歎き親の家を慕うた古歌が、今も尙宮古の島には傳はつて居て、其清水は既に涸れたと「古琉球」の中にも書いてある。

四

或は斯うした水までも足りなくて、遙々船に乘つて貰ひに來る島もある。沖繩本島では國頭の古宇利の島、先島では多良間の北沖に在る水納の島など、最も水に乏しい土地として知られて居るが、大きい島でも村によつては旱の苦みを惱みぬく者が稀で無い。その色々の例を見た後に、島尻地方などの岡の根方に、珊瑚岩層の割れ目から、澄み徹つた清水が滾々として、湧き且つ流れて居るのを見ると、實際誰人でも神の恩惠を考へずには居られない。中世の南山王國の廢墟は、今は神社と公園と小學校とに爲つて居る。其石壁の東北隅に立つて見下すと、屋古の古村の共同井がよく見える。大木の蔭に石を疊み、泉の口では水を汲み、其側では器を洗ひ、其下では衣を滌ぎ、其末では馬を冷し、數十人の娘たちが面白さうに一所に働いて居る。カンヂャヤーと名づけて旅の鑄物師が來ては仕事をする小屋なども、瓦で葺いて水の傍に建つて居り、尙下流に行くと流に橋があり、水車も此水に由つて廻轉し、數町歩の稻田も此から灌漑せられて居る。凡そ一村の生活は皆此泉を中心とするかの如く、結局水汲み場の唯一箇所であるのも、寧ろ部内の親睦を增すの途であるやうに思はれた。

琉球國舊記其他の古い書物に、由來を傳へられた嘉手志川は、卽ち此清水のことである。屋古は名を改めて今は大里と呼んで居る。古くは南山城の西の麓卽ち絲滿の港から登つて來る大手の口に在つたのが、此泉を慕うて次第に丘の

北側に移つて來た。嘉手志は沖繩語で、人の集まつて來ることを意味すると謂ふが、果してさうであらうか。土地の一說では、古くは又カタリガーとも稱へた。卽ち傳說の存する泉と謂ふことである。昔大旱の歲に人々船を仕立て、水を他處の岸に覓めんとして居る處へ、一匹の狗が全身沾れそぼたれてやつて來た。不思議に思つて暫く船出を見合せ、其狗を先に立てゝ林の奧深く入つて見ると、果せるかな此の如き立派な淸水が湧いて居た。而して狗は水中に入つて忽ちに石と化し、其石は今尙泉の上(かみ)に安置せられて鄕人の尊敬を受けて居る。古來の口碑は此の如くであるが、別に他村の靈泉にも同じ類の話がある上に、東方諸民族の間に於ては、是は寧ろ有りふれたる物語であつた。現に臺灣山地に住む幼稚なる部落の間にも、狗に導かれて淸水を見出したと云ふ舊傳が、幾らとも無く存在するから、恐くは此島に在つても亦、話の方が泉よりも尙一層古かつたのである。

屋古の語り井の歷史は、更に又南山王國の盛衰とも深い關係があつた。最後の城の主島尻大里按司は智慮の短い人であつた。佐敷小按司(さしきこあんじ)尙巴志が秘藏する名劒を所望の餘りに、此泉を與へて之に交易したと謂ふことである。尙巴志は泉の水を自由にし得るに及んで、自分に懷く者の田にばかり、之を引くことを許した故に、終には南山城下の民は未だ戰はざる前から、既に敵の佐敷小按司に、歸服してしまつて居たと傳へられる。勿論是も物語ではあらうが、兎に角に泉の德は神の德であつて、兼て又王の德であつたことが、島に來て見ると大方は想像し得られるのである。

五

所謂白鳥處女の傳說は、曾て高木敏雄君に由つて、其起原と分布とを說かれたことがある。神が人間界に配偶を求めたまふこと、鳥の形をして此世と往來したまふことは、至つて弘く且つ久しい傳承であるが、其が進んで三穗の松原や、近江の余吾湖の樣式を取るに至つたのには、又其地方に相應した何ぞの事情が有つた筈である。さうして沖繩の島では泉の神の信仰が、明白に物語の一要素を爲して居たことを認めざるを得ない。それに附けても玉城朝薰の銘苅子の一曲が、あまりに謠曲の羽衣に近いのは不本意である。沖繩の天女譚には、たしかに此島の地方色が有つたのを、かの才子は輕々に看過してしまつた。

銘苅子は那覇より程近い西海岸、安謝の村の農夫であつた。遣老傳の一說に今の天久の聖現寺の神なる熊野權現と辨才天とを、顯し祀り奉つたと傳ふる銘苅翁子と、恐らくは同じ人の事である。安謝の村では茗苅子の祠堂と謂ふものが、今も尙拜所の一つになつて居り、其由來談には謠曲の羽衣などには見られない、長い髮の毛の話が組入れられてある。茗苅子は或日田より歸りがけに、泉に臨んで手足を洗はうとすると、七八尺もある女の髮の毛が一すぢ、水の上に浮かんで居る。不思議に思つて折々其泉近くに身を潛めて窺ふうちに、終に嬋娟たる神女が衣服を樹の枝に脫ぎ掛けて、水に下つて頭髮を洗ふところを見付けた。仍て其衣を取匿し、搜してやると僞つて家に伴ひ還り且之を娶つた。後に一女二男を產ましむとある。其女の兒が稍成長して、弟の子守をするときに、泣くな、泣かぬなら、遣らうよ母の飛衣をと歌つた。六股の倉に、稻束の下に、置き古してあるからと歌つた。母の神女は之を聽き、夫の留守を待つて其衣を搜し出し、恩愛の絆を絕ち切つて、忽ち天界に飛び還つたと傳へて居る。

球陽には右の古傳を錄して、某の王妃は實に此神女の胤なりと謂つて居る。而ものんきな書物も有つたもので、殆ど全く此と同樣の物語を、更に尙二つまで同じ本の中に載せて居るのである。第四王朝の第一世に察度王と云ふ人は、微賤から身を起した浦添の按司であつたが、其家にも飛衣を匿されて凡夫の妻と爲つた天女の話がある。やはり泉の側で捉へられたことになつて居り、子供の歌から衣の所在を知つたのも亦同じである。

第三の話も多くの點に於て此と似て居るが、場處は隣村の西原間切我謝の烏帽子井と云ふ泉であり、農夫も小波津仁也と云ふ別の家の先祖であつた。この天女のみは天へ還る時に、二人の兒をつれて往つてしまつたと傳へられ、一つ

話の一つ天女の事とは認めにくく爲つて居る。而も此井は永く靈泉であつて、元祿三年以後にも三年に一度づゝ、中山王國の齋宮女王たる聞得大君が、親しく到り拜したまふほどの崇敬であつた。井の上には神の御嶽があり、其神の御名は「君が御水主が御水威部」、疑ふ所無く此泉の神であつた。以上三箇所の羽衣の物語の他に、琉球國由來記と琉球國舊記には、大里間切宮城村の、久場堂御嶽の下に在る遠蘇古井と云ふ泉にも、亦農夫に嫁したる第四の神女があつたことを記して居る。農夫此清水に近く家住みて、屢々天を射るほどの光が此井からさすのを怪み、夜更け人靜かなる時之を窺ふと、此世ならざる清い女性が五彩の衣を傍の枝に掛けて、只一人水際に立つのを見た。それから後の話は茗荷子に同じく、此も一男一女を生んだとある。只異なる點は此神女は、終に飛衣を見付け出すことを得なかつたか、永く人界に留まり死して其骨を久場堂御

嶽の大石の中に藏したと謂ふことである。嶽の神の御名は「一つ瀨安眞遠禮司の御威部」と傳へられる。アマヲレは卽ち天降である。ツカサは神の名にして又神に仕ふる女のことをも言ふ。一つ瀨は其神女の骨を納めた大石の名と謂ふが、それは或は干瀨から運んで來た石を、大瀨などゝ呼ぶことに基く想像であつて、やはりもと內地と同じやうに、沐浴の場所を意味した語であつたかも知れぬ。すぐれた先祖の骨を保存し、洗つて之を祭ることは島の宗敎の著しい特色であつた。此天女の生んだ女子、後に此村のノロ(祝女)と爲つたと云ふ傳へもあつて、人間に歸化してしまつた天女の家筋ではあつたが、やはりその最初の母を、天降る姫神として此御嶽には祀つたのである。

七

やまとの島々の神道に於ても、神は井の上、淸水の滸なる靈地に降りたまふと信ぜられた例は多いが、至極の篤信者で無ければ御姿を拜むことも出來ず、たゞ神を代表するよりましの女に由つて、間接の御聲を聽くばかりであつた。之に反して南の海の島々ほど、昔から天降の盛んであつた處は無い。世に大事の起る時、人に善惡の爭あるときは勿論のこと、何年に一度かある御祭の時にも、乃至は人の信仰の稍衰へんとする時にも、萬人一同に神の御姿を拜んだと云ふことは、段々の記錄がある。それが又決して大昔の世の事のみでは無かつた。今から百七十年前の寶曆年間にも、前年東宮殿下の御上陸なされた與那原の濱に、天女三人降つて多くの人に拜まれ、水などを浴みて長く遊んだと、大島筆記其他の本に述べてあり、其から更に四十何年の天保九年にも、久高の島に二柱の神顯れたまひ、全村之を拜せざる者は無かつたと球陽にはある。個々

の信者の見聞で無いだけに、普通の幻覺とも斷定してはしまはれぬ。自分の考では、是が古くから謂ふ所のミステリーなるもので、價値に於ては聊かも現實と違はぬ、特殊神聖なる演劇では無かつたかと思ふ。假に此推測の如しとしたならば、其神に扮した者は誰あらう、神に通じ且つ物忌の最も固かつたノロ卽ち村々の祝女で無ければならなかつたのである。大里宮城のノロの始祖が、御嶽に靈骨を藏する天降りの司である理由は、たゞ此解釋に由つてのみ、荒唐無稽で無くなるのである。

又次のやうな話も傳はつて居る。右の宮城と近く、同じ間切の稻嶺の村では毎年春の初の稻穗祭の日に、他の多くの村とは違つて、ノロが神々のトン(殿)を巡拜することをせぬ。其由來は、むかし鄰の部落の湧稻國の里に、容色絕世の若い祝女があつたのを、富盛城の主なる伊茶謝按司深く戀慕して、百方之に近づかうとしたけれども許さなかつた。稻穗祭の前の頃に、此ノロ寒水井の泉に往つて神衣を洗ひ、之を岡の上に白々と晒して置いたのを、按司遙かに望み訝つて、人を見せに遣つて之を知り、時こそよけれと刀を帶びて進んで之に迫つた。若きノロは其威勢に怖れて、深く御嶽の奥に隱れ、終に祭の日にも里に出て殿巡りをしなかつた。其が毎年の例と爲り、湧稻國と稻嶺ばかりは、ノロが此巡拜をせぬことになつたと傳へられる。

此物語の如きは、現實の歷史としても何の差支も無いのであるが、而も泉と云ひ白き衣を乾すと云ひ、神を祭るべき美女と謂ふに由つて、亦是れ一箇失敗したる茗苅子、乃至は小波津仁也の話では無かつたかを思はしめる。然らざればかの髮長き天女が、夙く人間の最も氣高い者を意味して居たのでは無いか。人天の堺の線は本は必ずしも明瞭では無かつた。さうして恰も其境の上に立つ

て、所謂のろ〳〵は神に仕へて居たのである。知念間切の齋場御嶽を始として村々の靈地は悉く男子の立入ることを禁じて居た。島々の祭の中には、今でも男の見ることをさへ許さぬものがある。祝女は神にかしづく女であれば、本來人間の男の近づき得ざる清らものであつたのを、政治の權力が宗教のそれよりも一段と強くなつてから、押してその物忌の衣を取匿す者を生じ、次第に神の國を遠く考へねばならぬ世中に、なつて行つたのでは無からうか。國頭地方の村々には、今以て公然の夫を持ち得ない祝女が有る。祝女のサトと爲る男は長く生きぬと云ふ話も幾度か聽いて居る。神を娶ると云ふ如き奇拔なる空想も、古風な社會に於ては少なくとも不自然で無かつた。

八

此につけて尙思ひ合すことは、久高の島で最近まで行はれた刀自覓めの習慣である。此島では人の妻となる者は、必ず祝言の席上から遁げ走つて、十日二十日の間、新郎に捕へられぬやうに力めねばならなかつた。此頃向上會と稱する青年團の骨折で、遁げ匿れて居る期間は四日を越ゆべからずと申合せ、女たちは寧ろ窃かに之を喜んで居ると云ふことだが、今迄は早くつかまつた花嫁を、何かみだらな女でゞもあるかの如く、嘲つて居たさうである。今の外間のノロクモイの如きは、七十二日の間見付けられなかつたと自慢して居る。周圍一里とすこしの小島の内ではあるが、御嶽の中には男子が憚つて

久高島の外間ノロと其家族
ノロが國手に持つは今は紙の扇

入らぬ爲に、此へ遁げ込めば何日でも捕へられずに居ることが出來た。多くの女はしば〳〵里へ食事に來たり、或は自分が先づ退屈して、そつと居所を知らせて來たりする故に、三週間とは續かぬのだと、此老女は謂つたさうである。斯う云ふ半は馴合ひの逃げ隱れであるが、それでも新郎は多くの友人の助力を賴み、實際血眼になつて搜しまはり、つかまれば又髮の毛を鷲づかみなどにして手荒い折檻をするのが作法である。晝間捕へると一室に押込めて張番を附けて置き、夜見付けたら直ぐに寢てしまふ。此時に花嫁は必ず悲しい聲を立てゝ泣くことになつて居る。其聲を聞付けて附近の人々、どこそこの嫁もとう〳〵捉まつたと見える。隨分長かつたとか、又は少し早過ぎるやうだとか、とり〴〵の評判をすると謂ふ話である。

是は祝女(のろ)でも無い只の女には、無用の手數のやうであるが、久高の島では實は全部の成長した婦人がカミンチュ(神人)である。十二年に一度づゝ、丑の年を以て行はるゝイザイ法と云ふ式の日に、七つの木の橋を滯り無く渡つて、一人より他の男は設け無かつたことを、神と村人との前に證明し得た刀自たちは悉く其日から神に仕へる女と爲り、祭のたび毎に二日前から小屋に籠つて、至つて重い物忌(ものいみ)をする。男に逢はぬは固よりのこと、乳呑兒までも引離して、時々小屋の外へ呼んで來ては乳を與へるばかりである。是ほど迄にしなければ、島の神々の御惠みに答ふるには足りなかつた。久高の男は年中海に出て働いて居るので、農作は全部が女の手業であつた。而も穢を忌むことがあまりに嚴かなる爲に、冬分は畠に肥料を施すことも出來なかつた。一度肥しを持てばすぐに海に下つて、髮の毛までもよく洗はねばならぬのが寒いからである。

九

銘苅子の天女が羽衣を泉の上の枝に引掛けた他に、長い〳〵髪の毛を水の上に殘し留めたと謂ふのも、やはり沖繩諸島の神道と何かの關係があるらしい。宮古島にはツンネーリ（鼓練）と云ふ神祭りの尊い踊があつて、今も平良の村で形ばかり之を行うて居る。昔根間の伊嘉利と云ふ人孝心深く、父の墓の側に廬して晝夜泣き悲んで居ると、折しも天川崎と云ふ處に泉湧き出で、仙女天降りして此水に沐浴す。伊嘉利は之を知らず夢に父蘇生したりと見て驚き喜んでそこへ往つて見ると、異香空に滿ち奇妙なる髪毛が二筋落ちて居た。之を拾うて還らうとすると、忽然として仙女現れ其毛を乞受けて去つた。鼓練の神の曲は其後磯邊をあるいて居て異人に逢ひ、三年の間海中の島に遊んで之を學んで戻つたと、宮古島舊史には記して居る。然るに別に沖繩の方へ傳はつた遺老の一說に於ては、話は著しく浦島子に近くなり、仙女は單に根間の伊嘉利の孝心を賞でたのみならず、長い三筋の髪の毛の返却を德として、他日自ら來つて彼を龍宮の金殿玉樓に誘うた。只の三日と思つたのが、還つて見れば人の世の三年であつたとある。而も此時に學んで來たと云ふ神踊は、それ以來十二年目に一度の九月吉日に、根所に集まつて嚴重に之を行うて居た。之に與かる者二十五人、內一人は冠に白鷺の羽を貫連ね白い裝束を着て、雞の尾羽の冠に紺の衣を着た二十四人に取圍まれ、名藏草紙と云ふ詞を唱へ、拍子を取り鼓を打つて十三日の間踊るのが、中古までの例式であつたと謂へば、仙女が徒らに假初の緣を結びに、出現したので無かつたことは略わかる。

沖繩本島でも首里に近い南風原間切の與那覇に今一つ浦島に似た話がある。

美しい女性に誘はれて龍宮に遊び、僅か三月と思つて還つて見ると、此世は既に三十三代を經て、もう子孫と云ふ者も無かつた。之を怪んで開くなと戒められた紙包を解くと、中には白い毛髪が有るのみで、それが皆飛んで此男の顔にくつつき、忽ち衰老と爲つて死んだとある。よく此だけ迄似たものだ。或は一方の輸入かとも思はれるが、而も最初に仙女に逢うた因縁は、龜を放して助命したので無く、やはり宮古島の根間の伊嘉利と同じく、濱に出て異常なる髢を拾ひ、翌日落し主を探して美しい女性に返した爲で、是れ即ち我物なり、汝は眞に善人と云ふことになつて、海の都には招かるゝに至つたのである。この沖繩の浦島太郎が、死して葬られたと云ふ地は後に御嶽になつた。其山には桑の木が多く野生し、もと此男の突立てた桑の杖が、成長して繁茂したと傳へて居た。杖は即ち旅人のしるしであるが、而も其杖を伐つて來た神の島は、もう何れの海にあつたかも不明である。

一〇

際限も無いから話は此邊で止めたいが、要するに沖繩諸島の神女は、殊に沐浴を愛した。恰も村々の祝女が靈泉に由つて、其清淨を保たうとしたのと同じである。其泉は又酒を釀すにも必要であつた。酒造りも亦女の仕事である。さうして仲城安里の佐久井などの如く、井の畔で神女に逢ひ、夕毎に一壺の酒を賜はつた話もある。女房が之を嫉んで往つて見ると、壺の酒は乃ち變じて水と爲ると云ふこと、本州諸國の强清水と云ふ泉に、しば〳〵「親は諸白子は清水」の話を傳へるのとよく似て居るが、而も沖繩の酒泉傳說に於ては、其村のノロは永く此井の水を汲んで、稻祭の日に神に供へて居たのである。暑くして水の

大切な島であるが故に、泉に伴ふ神の口碑が多いのか。はた又女性が祭と水とを掌るが故に、水の邊に神を拜するの風が、次第に戀しなつかしの情緒をさそふやうになつたのか。許田の手水を始として、美しい多くの夢物語が、往々にして清水と處女とを結び合せ、島人の文學に向つて無限の涼味と休息とを供與せんとして居る。何れにしてもその由つて來る所は久しいのである。

之に比べて見るとやまとの島の我々には、少しばかりきまりの惡いことがある。こちらの方でも海近くなどの水の戀しい地に、圖らず清冽甘美なる泉を見出すとはあるが、さう云ふ場合には多くは弘法大師を說き、且つ之に配するに一人の老婆子を以てする。あまりとしても彩色がくすんで居る。昔はきつと斯うでは無かつたらうと思ふ。大師が全國を行脚して、水ばかり求めて居たのもよろしい。たつた一杯の水の親切にめでゝ、立派な清水を善良なる老女に與へた迄はよろしいが、少しく不親切な鄰の婆があれば、すぐに又其制裁を下して芋を石芋にし、井戸を鹽水泥水にして往つてしまつたと云ふのは、佛法の祖師よりも寧ろ遙か以前の神樣の如き、烈しい愛憎では無からうか。沖繩へは幸にして斯んな弘法大師は渡らなかつたが、やはり若干の最も世話燒きなる、且つ中々機嫌の取りにくい旅人が昔あるいて居る。例へば佐敷間切の津波古の村に於ては、古くから稻の大祭を行はず、又五月六月の稻苅時に際して、決して驟雨が降らぬ。これは曾て此里の名水多和田井の側に於て、或老女が水を汲まうとして來て見ると、井戸の左手の石の上に立つて、水を一杯と所望した人がある。老女は乃ち持つて來たマガリ(碗)の緣をわざと打缺いて、それから水を汲んで進らせた。何の爲に打缺いたかと旅人が問ふと、私が平生用ゐて居る器で穢があつては畏多い。どうかその缺いた所から飲んで下されと答へたので、旅

人の機嫌は非常によくなり、此村では何か困ることは無いかとある。農作忙しき最中に二度の稲祭のあることが一つ、稲を苅乾す頃の夕立の難儀が又一つと答へると、よろしい此からは、五月六月に俄雨は降るまい。稲の大祭はせずともよしと、斯ういふ約束をして往つた以上は、神様に相違が無かつた。故に井の左に在る石を紀念として居る。僅か茶碗の縁を少し打缺いたどけの誠意にも此だけ十分なる恩惠が酬いられた。況や許田（きよだ）の手水は花よりも更に艶なる若い娘が、玉の手に透きとほる水を掬して勸めたのであつた。其旅人が若し旅の神ならば、必ずや其泉をして、愈澄み愈甘くつめたからしめ、歌ともなり又物語ともなつて、流れて永遠に島人の情をやさしく、夢を清からしめんとしたことであらう。日本の神代史のわたつみの宮は、即ち琉球のことだらうと云ふ説がある。然らば大昔、最も尊くして且つ若い神が、海で失せたる寶の釣針を捜しに、遙々と離れ小島の旅をなされた時、百枝さす湯津香木（ゆつかつら）の樹蔭に於て、少女の手に持つた玉の碗から、樂しく御飲みなされと云ふ清水は、今果していづこの海端に湧き且つ流れて居ることであらうか。平和豐饒なる村里の數が追々に多くなつて、必ずしも精確に神の御悦びの場處を記念し得ずとしても、我々は尚永く清き泉に對して、此民族の優雅にして敬虔なる性情が、自然に神に仕へる道に適して居たことを、想像することが出來るのである。

炭焼小五郎が事

一

大正九年の九月一日であつたかと思ふ。私は奥州の海岸を傳うて、とう〳〵尻矢(しりやざき)岬の突角に辿り著き、燈臺裏手の岩に腰かけて、荒く寂しい北方の海を眺めた。三戸(のへ)郡の鮫港から、此附近に來て事業をして居る本間君と云ふ人が、最も親切に世話をしてくれたので、別れに臨んで今に南九州に遊びに行くから、南の端の大隅の佐多岬(さたのみさき)から、必ず通信をしようと云ふ約束をした。ちやうど丸四ヶ月の旅行の後、豫定の如く佐多の田尻と云ふ村に宿して、元旦の鷄の聲を

聽き、年始の狀を本間君へ出したときは、何か大きな仕事を終つたやうな、滿足を感じたのであつた。佐多の燈臺監守の三宅氏は、家は相州に在るが尻矢の事もよく知つて居た。尻矢や遠州の御前崎、或は豐後水道の水之子などでは、渡り鳥の季節には燈臺の光に迷はされて、大小無數の鳥類が、突當つて落ちて死ぬと謂ふが、佐多では神の森がよく茂つて居る爲か、其樣なことが少ないと云ふ話もした。こんな細長い日本の島が、一つの國である爲に生活事情も亦一つで、坐して千里の天涯に在る雪の荒濱を、恰も鄰家の噂をする如く話し合ふことが、此日は特別に有難く思はれた。

佐多の島泊から伊座敷に越える山路を、豐後から來た炭燒が獨力で開いた話は、もう本文にも書いて置いたが、どう考へて見ても自分には、奇緣とより他は感ぜられなかつた。豐後は今に於て尙炭燒の本國である。其一半は進化してナバ師卽ち椎茸作りと爲り、各地に招かれて、盛にナバ木の林を經營して居るが、他の半分は昔ながらの炭を燒くべく、此頃は主として鄰國日向の東臼杵の奥山に入つて居る。炭燒には人も知る如く、現在尙傳授を必要とする技術があつて、同じ楢なり櫪なりを伐つても、土地と竈とに由つて出來る炭には差等がある。而も普通の民家に火桶を用ゐるに至つたのは、煙草などよりも更に新しいことで、偏土の山に炭を燒いた始は、必ず別に尋常ならざる需要があつた爲と思はれる。さすれば何が故に豐後の炭燒のみが夙く人に知られ、殊には小五郎長者の物語が、遠く久しくもてはやされるに至つたか。

大分縣方言類集に依れば、宇佐郡などで炭をイモジと謂ふとある。是が若し炭の最初の用途を語り、更に一歩を進めて宇佐の信仰の極めて神祕なる部分、卽ち所謂薦の御驗、黃金の御正體の由來を解き明かす端緒ともなるならば、我

我の學問は永く今日のしどけなさに棄てゝ置かれる患も無く、夢のやうな村々の歌が尙至つて大切なる昔を、忘却から救うて居たことを、追々に認める世の中が來るであらう。

自分は尻矢外南部（そとなんぶ）の旅を終つてから、船で靑森灣を横ぎつて津輕に入り、弘前の町に於て始めて此地方の炭燒長者の話を知つた。豐後に起つたことは疑が無い炭燒の出世譚が、ほんの僅かな變更を以て、本土の北の端までも流布するのは如何なる理由であるかを訝るの餘り、稍長い一篇の文を新聞に書いて置いて、九州の旅行には出て來たのであつた。豐後をあるいて見ると考へねばならぬことが愈多かつた。其から途上に幾度と無く斯んなことを空想しつつ、佐多の島泊までやつて來て、さうして又豐後の炭燒の小屋の前を過ぎたのである。自分の想像では、豐後の國人は今でも炭燒を以て微賤にして恥づべき職業と思つては居らぬやうである。聞いて見る機會は無かつたが、此小屋の主人なども或は炭燒だから斯う云ふ尊い事業をするのだと考へて居たのかも知れぬ。近年「石佛を以て一層有名になつたが、臼杵の城下に近い深田の里には、小五郎が燒いたと云ふ炭竈の址あり。岩のくづれの間から炭の屑の化石と云ふ物が無數に出る。長者の後裔と稱する家には、俵のまゝ燒けた炭が二俵と鉈などを持ち傳へ、一年一度の先祖祭に之を陳列して人に見せる。或は又家傳の花炭と稱し、七十八代の間連綿として、之を製したと云ふ由緒書も傳はつて居る。卽ち或特定の家族に於ては、此物語は今も決して單純なる文學では無いのである。」

大昔小五郎の炭を燒いたのは、別に重要なる目的のあつたものと推測する者は既に多かつた。長者大に家富みて後に、召されて都に登つた愛娘（まなむすめ）の船を、遠く見送つて別を惜んだと云ふ姫見嶽から、この深田の村近くまで、現に皆金銅

鑛の試掘地に登錄せられて居る。前に臼杵の警察署長で、後に大分銀行の支配人と爲つた某と云ふ人が、傳說から思ひ付いて出願したのがもとであるが、今は或大阪人が買取つて權利を持つて居る。爰から七八里離れた大野郡三重町の內山も、內山觀音の緣起に依れば、小五郎の初の在所であつて、炭を燒いて居た故迹は、程近い神野(かうの)の山家であつたと傳へる。而も燒いた炭をどうしたかと云ふことには考へ及ばずに、例の朝日さし夕日かゞやく云々の歌などに由つて、長者の寶を埋めた地を見付けようと、そこら掘返した人が幾らもあつた。明治の少し前もこの內山で、金の蒲鉾形の物を多數に發掘したことがあつたと謂ふ。それを買取つて外國人に賣り、後に發覺して獄に投ぜられ、維新の大赦で出牢を許された人のあることを、その實物を見たと云ふ人の子息から、匿名で知らせてくれらたこともあつた。傳說と歷史とは、人がこれほど賢くなつてしまつ時代までも、まだ紛亂し混淆し、且つ身勝手に誤解せられて居るのである。況や鄕土を愛する人々は、多く一地方の古傳に割據して、目前の因緣關係をすらも否認する爲に、一層此問題が解きにくゝなつてしまふのは、誠に是非も無い次第であつた。

二

炭燒長者の話は、既に新聞にも出したのだから、出來るだけ簡單に、その諸國に共通の點のみを列擧すると、第一には極めて貧賤なる若者が、山中で一人炭を燒いて居たことである。豐後に於ては男の名を小五郎と謂ひ、安藝の賀茂郡の盆踊に於ても、其通りに歌つて居る。卽ち

筑紫豐後は臼杵の城下

葉で髪ゆた炭燒小ごろ

なる者である。第二には都から貴族の娘が、兼て信仰する觀世音の御告げに由つて、遙々と押掛け嫁にやつて來る。姫の名が若し傳はつて居れば、玉世か玉屋か必ず玉の字が附いて居る。容貌醜くゝして良緣が無かつたからと謂ひ、或は痣が有つたのが結婚をしてから無くなつたなどゝ謂ふのは、何れも後の說明かと思はれる。第三には炭燒は花嫁から、小判又は砂金を貰つて、市へ買物に行く途すがら、水鳥を見つけてそれに黃金を投げ付ける。それが此物語の一つの山である。

をしは舞ひ立つ小判は沈む

とあつて、鳥は鴛鴦であり或は鴨であり鷺鶴であることもあつて一定せぬが、兎に角必ず水鳥で、其場所の池又は淵が、故跡と爲つて屢永く遺つて居る。第四の點は卽ち愉快なる發見である。何故に大切な黃金を投げ棄てたかと戒められると、あれが其樣な寶であるのか、

あんな小石が寶になれば
わしが炭燒く谷々に
およそ小笊で山ほど御座る

と謂つて、それを拾つて來てすぐにする〳〵と長者になつてしまふ。

右の四つの要點のうち、少くとも三つ迄を具備した話が、北は津輕の岩木山の麓から、南は大隅半島の、佐多からさして遠く無い鹿屋の大崟村に亘つて、自分の知る限でも既に十幾つかの例を算へ、更に南に進んでは沖繩の諸島、殊には宮古島の一隅に迄、若干の變化を以て、疑も無き類話を留めて居るのである。事小なりと雖看過すべからざる奇事であつて、自分が日本のフォクロア與

隆の爲に、何とぞして其由來を究めたいと云ふ誓願を立てたのも、亦のがれ難き因緣であつた。

炭燒小五郎は莫大の黃金を感得して後に、其名を眞野長者と呼ばれ、或は又萬之長者とも謳はれて居る。眞野長者の榮華の物語は、中世民間文學の眞只中であつて、豐後と謂へば忽ちに此長者を想ひ浮べるほど、都鄙を通じてよく知られて居たのであるが、不思議なることには其出世の始を語つた、炭燒婚姻の一條のみは、之を豐後の出來事として、認めざる者が甚だ多い。現に津輕に於ては之を伯爵家の系圖の中に編入し、第四代左衞門尉賴秀、幼名は藤太、元仁元年九月生る。六歲の年父秀直、安東勢と津輕野に戰ひて討死す。仍て乳母に扶けられて姉の夫橘次信次の許に匿れたり。橘次は新城の豪族にして、黃金を採掘して之を賣りて富を致す。藤太を常人と共に使役して敵を欺かんと、戸建澤の山中に遣りて炭を燒かしむ。故に人呼びて炭燒藤太と謂ふとある。民間に於ては近衞殿の女福姫、もと甚だしい醜婦であつたが、津輕にさすらへ來りて或川の水に浴し、忽然として美女となり、後炭燒藤太殿に嫁したまふなどゝ謂ふ。鳥に小判を投げたといふことも、有るといふ話である。此等の古傳の少くとも一部分が外部からの混入であるとは、愛鄕心の强い學者たちも之を認めて居る。近衞家との關係の其樣に古くは無いこと、或は藤太の母が唐絲御前で、卽ち最明寺時賴の落胤であつたと云ふ說の無稽なと等は、今や誰も之を爭ふ者が無い。而も自分などが最も明瞭なる輸入の證とする點は、此の如き消極の材料では無くて、炭燒藤太と云ふ名前であり、又橘次と謂ふ金賣のあつたことである。豐後の方では此事は更に說かぬが、東日本へ進むほどづゝ、金賣吉次が突進して、炭燒の藤太と接近せんとする。就中羽前村山郡の寶澤と、岩代信夫

郡の平澤とには、共に炭燒の藤太が住んで居た遺跡があつて、水鳥に向つて小判を打付けたと云ふ池も、双方ともにちやんと在り、而も緣あつて遠國から來た花嫁の忠言に由り、後に無量の黄金を得たときには、何れも此水を以て之を洗つたやうに傳へて居る。吉次吉内吉六三兄弟の金賣は、卽ち藤太の子どもであつて、彼等は單に父の幸運を以て授かつたものを、都へ運んで居たに過ぎぬことも、二處同樣の口碑である上に、記念として今日に殘るものに、福島に在つては鄰村石那坂の吉次宮あり、山形の吉事の宮は、後に兩所宮と改稱して、鳥海月山の二靈山を奉祀すと謂ふも、尙且つ義經が賴を受けて、吉次信高之を再建すと語り傳へるのである。兄弟の金賣が家の跡と稱する地は、勿論京都にもあれば、平泉の衣川の岸にもある。然るに陸前栗原郡の金田村には、長者屋敷と名づけて又一つ彼等の故鄕があり、近世に入つてから殊に色々の珍しい財

寶を掘出したと云ふ噂を聞くが、此地に於ても父は炭燒であつたと謂ひ、其炭燒の名は藤太である。清水の觀音の御告げを受けて、京から嫁に來た姫が徒渉りをしたと云ふ小褄川、藤太が姉齒の市へ米を買ひに行く路で、雁に小判を投げたと云ふ金沼などもやはり有るので、理由は知らずずつと古い時分の、互に比較をする折も無い頃から、斯うして話は方々の土に、何れも立派な根をおろして居たのである。

それを移植若くは接木と見るとは、我々にはどうしても出來ぬ。第一には模倣をせねばならぬ理由も無く、又さうする機會も有りさうに無い。既に他鄕でもてはやされて居ることを知れば、寧ろ語り傳へる張合ひが無くなるべきことは、近頃漸く同種の珍談が、他府縣にも有ることを知つた人々の、驚く顏失望する顏を見てもよくわかる。但し少くとも古い清水、濠の跡とか無名の塚とか

所謂由有りげなる處には、其邊を浮遊する昔物語の破片が、いつの間にか來て取附くことは、恰も米を寢させると麴と爲り、木を伐倒して置けば椎茸が成長するのと、ほゞ同じやうな作用である。口から耳へ傳承する文學の、書籍以上に保存が六かしく、何かの原因で保存を業とする者が無くなれば、忽ち散亂して原の形を留めず、只其中の印象强き部分のみが、斯うして我々の記憶に殘ることは、今の世中でも普通の現象であつて、之を考へると此種の偶合は必ずしも奇異では無く、單に斯くばかり弘い地域に亙つて、如何なる事情が同じ話の種を、播いてあるいたかを尋ねて見る必要があるのみである。

三

前代の地方人が傳承に忠實にして、甚だ創作に拙であつたことは、四箇所の炭燒長者の名が悉く藤太であつたと云ふやうな、些細な點からも窺ふことが出來る。是が心あつての剽竊であつたならば、寧ろ名前ぐらゐは變へたであらう。然るに幾つかの山川を隔てゝ信州園原の伏屋長者(ふせやちやうじや)なども、先祖は金賣吉次で其父は亦炭燒藤次であつた。阿智川(あちがは)の鶴卷淵は亦例の通り、鶴は飛び立ち小判は沈むと云ふ故迹であつて、是も物語の要點はすべて皆、豐後の長者譚の第一節と異なる所が無い。豐後の眞野長者は小五郎であるが、それは炭燒の子に養はれてから後の名で、童名はやはり藤治と呼ばれて居たとある。數多の國所を經廻つて、此だけの月日を重ねて後迄、話の興味とはさして關係も無ささうな、名前すらも變化をしなかつたと謂ふのは、恐くは歌の口拍子の力であらう。

此序に尙少しばかり、名前の點に付て考へて見たいのは、同じ盆踊の歌でも筑前朝倉郡に現存するのは、藝州に於て臼杵の小五郎を說くに反して、別に「豐

後峰内炭燒又吾」と謂ひ、「又吾さんとも謂はれる人が、こんな寶を知らいですむか」ともうたうて居た。峰内は卽ち三重の内山觀世音の地をさしたものらしく、今も彼處に傳はつて居る長者の記錄では、又吾は小五郎を養育した親の炭燒の名であつて、爰に亦一代の延長を見るのである。大野郡の三重と海部郡の深田とは、山嶺を隔てゝ若干の距離がある。長者が船著きの便宜の爲に、海に臨んだ眞名原の地に、居館を移したと云ふのは説明であるが、然らば兩處で炭を燒いて居たと云ふ言ひ傳へは成立せぬ。兎に角に蓮城寺と滿月寺と、二箇の佛地の緣起には矛盾があり、之を流布した者の間にも、近世東西本願寺の如き爭奪のあつたことが稍推測し得られるやうである。其上に更に一つの錯綜は、周防大島浦の般若寺の方からも加はつて居るらしいが、是はまだ目が屆かず、且つ直接に炭燒の話とは緣が無いから殘して置く。之を要するに豐後の本國に於ては、却つて後代の紛亂があつて、昔の物語の單純なる樣式は、別に四方に散亂した、首尾整然たらざる斷片の中から、次第に之を辿り尋ねるの他は無いやうになつたものと考へられる。

舞の本の烏帽子折の中に、美濃の青墓の遊女の長をして語らしめた一挿話、卽ち山路が牛飼ひの一段は、文字の文學として傳はつた最も古い眞野長者であらう。用明天皇職人鑑を始めとし、近世の劇部は概ね範を此に採り、現に豐後に行はるゝ長者の一代記の如きも、或は飜つて其説に據つたかと思ふ節があるが、固より必ずしも之を以て、久しい傳承を改めざりしものと信ずるには足らぬのである。長者の愛娘が觀世音の申し兒であつて、容色海内に隱れ無く、天朝百方に之を召したまへども、終に御仰せに從はなかつたと謂ふのは、竹取以來の有りふるしたる語り草ながら、之を假り來つて後に萬乘の大君が、草苅る

童に御姿をやつして、慕ひ寄りたまふと云ふ異常なる出來事を、稍實際化しようとした所に文人らしい結構がある。然るに其皇帝を用明天皇とした唯一つの理由は、生れたまふ御子が佛法最初の保護者、聖德太子であつたと謂はんが爲であつたらうに、其點に付ては何の述ぶる所も無い。而も牛若御曹司の東下りの一條に、突如としてこの長物語を備ひ入れたには、何等かの動機が有つた筈である。今は章句の陰に隱れて居る笛の曲に、山路童の神祕なる戀を想ひ起さしむる節があつたか。或は海道の妓女たちが、眞野長者の榮華の物語を、歌にうたつて居た昔の習慣が、斯うして半ば無意識に殘つて居るのか、はた又金賣吉次三兄弟の父が、かの幸運なる炭燒であつたと云ふことが、將に漸く信ぜられんとする時代に、最後の烏帽子折の詞章は出來たのであらうか。何れにしても此中に保存せらるゝ、山路と玉世姫の世にも珍しい婚姻は、卽ち長者の大なる物語の一節であつて、而も或時に語部の興味から、早既に著しい改作を加へて居たことを知るのである。

四

溯れば源は尙遙かである。神が人間の少女を訪らひたまふと云ふことは、豐後に於ては嫗嶽の麓に、花の本の神話として夙く之を傳へて居る。神裔は永く世に留まり、卽ち緒形氏の一族と繁衍したと謂ふ。緒形は又大神田とも書くものあり、大和の大三輪の古傳と、本は一つであらうと謂ふ說も、尙其據り所無しとせぬのであるが、更に之を隣國宇佐神宮の信仰に思ひ合せるときは、先づ其脈絡關係の殊に緊切なるものあるを認めざるを得ぬ。八幡は最も託宣を重じたまふ大神であつた。歷史の錄する所に從へば、其巫女の言は時代を遂うて進

展し、現に朝家に在つては年久しく宗廟の禮を以て之を齋ひ祀られてあるが、當初は單に尊き御母子の神と信ぜられ、必ずしも紀記に傳ふる所の應神天皇の事績とは一致せず、恰も山城の賀茂に於て別雷神と其御母とを祀るが如く、茲にも亦玉依姫は、其姫大神の御名であつた。大隅正八幡宮の如きは、後に宇佐より分れたまふ御社かと思ふのに、其社傳に於ては別に神祕なる童貞受胎の說があつて、頗る高麗百濟の王朝の出自と相類し、直接に日神を以て御父とすと迄信じられて居た。是れ國家の未だ公に認めざりし所ではあるが、少くとも以前の信徒の多數に、此の如く語り傳へる者はあつたのである。眞野の長者が放生會の頭に選ばれて、門前に榊を樹てられた時、流鏑馬の古式を知る者無くして、誰にてもあれ此神事を勤め得たらん者を、一人ある娘の聟に取らうと謂ふと、乃ち山路が進み出でゝ、始めて射藝を試みるといふ一段は、後に百合若大臣の物語にも、取り用ゐられたる花やかな場面で、此曲に聽き入つた豐後人の胸の轟きは想像にも餘りがあるが、其よりも更に驚くべかりしは、愈〻第三の矢を引きつがへて、第三の的にかゝらんとしたまふ時しも、天地震動して八幡神は神殿を搖ぎ出でたまひ、君の御前に畏まつて、自ら敬を十善の天子に致したまふと云ふ條である。卽ち神よりも尊い御身が、斯んな草苅童の姿を假りて暫く長者の家に止まりたまふと云ふことが、果して尋常文藝の遊戲として、古人の口の端に上るべきものであつたか否かは、詳しく說明する迄も無いのである。宇佐が古來の傳統に基いて、次々に四所八所の若宮王子神を顯し祀り、遠い東方の郡縣に、絕えず活き〳〵とした信仰を運んで居たことを考へると、其力が山坂を越えつゝ、南鄰の國々へも早くから、斯うして進んで居たことは疑が無い。要するにもと山路が笛の曲なるものは、神が人間界に往來したまふ

折の警蹕の音であつたのを、佛法が干渉して神子を聖德太子と解せしめんとしたゞめに、是を何のつきも無く、用明天皇には托するに至つたのである。

此推定を更に確めるものは、姫の名の玉世であつた。宇佐の姫神の御名を玉依姫と傳へた理由は、久しい間の學者の問題であつて、或は之に由つて山に祀つた御神を、海神（わたつみ）の御筋かと解する者さへあつたが、神武天皇の御母君が、同じく玉依と云ふ御名であつたことは、唯多くの例の一つと謂ふばかりで、前にも云ふ如く賀茂でも大和でも、凡そ神と婚して神子をまうけたまふ御母は、皆此名を以て呼ばれたまふのである。玉依は卽ち靈託であつた。人間の少女の最も清く且つ最もさかしい者を選んで、神が其力を現したまふことは、日本神道の一番大切なる信條であつた。神の御力を最も深く感じた者が、御子を生み奉ることも亦宗教上の自然である。今日の心意を以て之を訝るの餘地は無いのである。眞野長者が愛娘も、玉世であつた故に現人神（あらひとがみ）は乃ち訪ひ寄られた。それが亦八幡の古くからの信仰であつた。

或は又別の傳へに、姫の名を般若姫と謂ふものがある。周防大畠に般若寺があつて、姫の廟所なりと謂ふ說と關係があらうと思ふが、尙さうしなければならぬ第二の必要は、姫の母長者の妻を亦玉世姫と謂ふ故に、之を避けんとしたものであつて、爰にも此物語の古い變化が認められる。烏帽子折の挿話に於ては、長者の妻は其夫に向つて、「御身十八自ら十四の秋よりも、長者の院號蒙つて、四方に四萬の藏を立て」と謂ひ、山中に炭を燒いた以前の生活は、もう之を忘れしめられて居るやうであるが、此點は恐らく豐後人の承認し能はざる改訂であつたらう。長者の物語は其性質上、斯うして際限も無く成長し、後には繪卷の如く幾つかに切り放して、纒めて見れば一致せぬ箇條が、現れて來るの

を普通とはするが、今若し母と子と二人の玉世の、何れが先づ知られたかを決すべしとすれば、自分は躊躇無く話の發端であり、發生の動機の不明であり、且つ類型の少ない炭燒の婚姻を以て、神を聟とした玉世の姫の奇緣よりも、一つ前から存在した場面なりと認める。然らば宇佐の玉依姫の故事も、此には適用が無かつたかと謂ふと、それは唯記錄に現れてからの八幡の信仰が、第二の玉世の物語に近かつたと云ふのみで、神を尋ねて神に逢ふと云ふ更に古い炭燒口碑が尙古く存し、時の力で十分に人間化して、斯うして久しく殘つて居たとも、考へられぬことは無いのである。炭燒はなるほど今日の眼から、卑賤な職業とも見えるか知らぬが、昔は其目的が全然別であつた。石よりも硬い金屬を制御して、自在に其形狀を指定する力は、普通の百姓の企て及ばぬ所であつて第一には夕ヽラを踏む者、第二には樹を焚いて炭を留むるの術を知つた者だけが其技藝には與つて居たので、之を神技と稱し且つ其祖を神とする者が曾てあつたとしても少しも不思議は無い。扶桑略記の卷三、或は宇佐の託宣集に、此郡厩(うまや)の峰菱潟(みねひしかた)の池(いけ)の邊に、鍛冶(かぬち)の翁あつて奇瑞を現ず。大神(おほみわ)の比義なる者、三年の祈請を以て之を顯し奉る。乃ち三歳の小兒の形を現じ、我は是れ譽田(ほんだの)天皇なりとのりたまふとある。若し自分などが推測する如く、比義は最初の巫女の名であつたとしたら、貴き炭燒小五郎が玉世に由つて顯れたと謂ふのは、極めて之に近い神話から、成長して來た物語と見ることができるのである。

五

天皇潛幸の畏多い古傳は、かの炭燒藤太の出世譚と同じく、亦弘く東北に向つて分布して居る。富士淺間(せんげん)の御社に於ては、竹取物語の一異說として、かく

や姫は聖德太子の御祖母なりと傳ふること、廣益俗說辨に擧げられ、有馬皇子が五萬長者の姫を慕ひ、下野に下つて暫く奴僕に身をやつしたまふといふことは、慈元抄に之を錄して居るが、其よりも更に類似の著しいのは、岩代苅田宮の口碑である。是は物語と謂ふよりも寧ろ現存の信仰であつた。用明天皇或年此國に幸したまひ、玉世姫を娶りて一人の皇子を儲けたまふ。妃薨じて白き鳥と化したまふ。祠を建てゝ祀り奉り白鳥大明神と謂ふ。水旱疾疫に祈りて必ず驗あり、土人は今も白鳥を尊崇して、敢て之に近づく者も無いとある。後世の學者には此說の正史と一致せざるを感じ、白鳥の靈に由つて日本武尊の御事ならんと論ずる者があつた。社傳も亦漸く之に從はうとして居るが、鄕人古來の傳承は、尙容易に動かすことを得ないやうである。此地方には一帶に、鵠を崇敬する白鳥明神の例が多い。柴田村では平村の大高山神社、之に隣する村田足立二處の白鳥社が、相連繫してよく似た傳說を奉じて居る。但し緣起は何れも三百年來の京都製であつて、殊に別當寺と神主側と互に相容れざる言立をして居るのは怪しいが、双方の偶然に一致して居る箇條は、却つて最も荒唐信ずべからざる部分、卽ち乳母が稚き皇子を川の水に投じたるに忽ち白鳥と化して飛揚り去りたまふと云ふ點に在る。此の如き一見無用なる悲劇は、固より後人の巧み設くべき物語で無い上に、苅田宮の方にも同じく兒宮子捨川投袋などの舊跡があつて、此と共通なるきれ〴〵の口碑の今も有るを見れば、何か尙背後に深く隱れたる神秘が有るのであらう。それは又別の折に考へるとして、兎に角に御父を用明天皇、御母の名を玉倚媛とする尊い御子が、此地に祭られたまふ神なりと弘く久しく信ぜられて居たことだけは偶然の一致では無かつたらうと思ふ。以前平の隣村、金瀨宿の總兵衞と云ふ者の家には、古風なる一管の笛

を藏して居た。其先祖某、或時林に入りて大木を伐り、其空洞の中より之を見出したと傳へ、笛頭には菊の紋が彫つてある。是れ卽ち山路用ゐる所の牧笛なるべしと、土地の人たちは謂つたとあるから、あの物語の爰でも歌はれて居たことは疑が無いのである。

長者の娘、容顏花の如くにして、終に內裡に召され、妃嬪の列に加はつたと云ふ話は、備後の鞆津の新庄太郎、常陸の鹿島の鹽賣長者等其例少からず、古くは又實際の歷史であつたかも知れぬが、特に之を用明天皇に係けまつるに至つては、乃ち亦豐後の影響なることを感ずるのである。炭燒藤太の舊住地の一つ、陸前の栗原郡に於ては、姉齒の松の古事に托して、美女の途に死したる哀話を傳へて居る。氣仙高田の武日長者が姉娘であつたと謂ふ。妹は後に代りて京に上らんとして、姉が墓の松に對して涕泣したと稱して、紙折坂の地名もあ

る。用明帝の御代の事と謂ひ、側に神通山用明寺があつた。陸中鹿角郡小豆澤のダンブリ長者は、蜻蜓に敎へられて酒の泉を發見し、之に由つて富を積んだと謂ふ有名な長者である。唯一人ある愛女を皇后に召されて、寂寞の餘りに財寶を佛に捧げたと云ふことが、是亦眞野長者の生涯に似通うて居るが、彼地に於ては之を繼體天皇の御時と傳へて居る。嶺を隔てゝ二戸郡の田山に於ても、田山長者の事蹟は全く是と同じく、是は唯大昔の世の事とばかりで、何れも既に至尊巡狩の傳へは存せず、いよ〳〵本の緣は薄れて居るが、尙此物語の獨立して起つたので無いことは、之を推測せしむる餘地が有るのである。

其理由の一つとして算へてもよいのは、所謂滿能長者の名が、遠く本州の北邊まで知れ渡つて居たことである。蜻蜓長者の例を見てもわかるやうに、大凡長者の名前ほど、變化自在なものは無い筈であるのに、說話中の長者の極度の

富貴に住する者は、往々にして其名が滿能であつた。自分が始めて炭燒藤太の話を書いた後、八戸の中道等君が同處のイタコから、正月十六日のオシラ神遊びの詞曲を聽いて、手錄した所の一篇にも、やはり「まんのう」長者とあつた。イタコは奥州の村々に於て、桑の木で刻んだ男女の神に仕へ、神託を宣るを業とする盲目の女性である。世を累ねて曾て文字無く、授受を苟くもせぬ彼等の經典に、尙この名稱を存して居るのは、尋常流行の章句と同一視することが出來ぬのである。但し此曲に說く所は、炭とは何のゆかりも無い養蠶の起原であつた。長者が槪第一の駿馬せんだん栗毛、たゞ一人ある姫君に戀慕して命を失ひ、其靈は姫を誘ひて上天し、後に白黑二種の毛蟲となつて現れたのを、十二人の女房と八人の舍人、こかひ母、桑取り王子と爲つて之を養ふと謂ふのが其大要で、之に續いて春駒によく似た文段がある。于寶が搜神記は中央の學者等に取つても、手に入り易い平凡の書では無かつたのに、如何なる徑路を經廻つていつの時から、それと同じい話が北奥の地にばかり、斯うして姫見嶽の長者の名と結合しつゝ、巫女の秘曲には編入せらるゝに至つたか。誠に過去生活の不可思議は、窺ふに隨つて益々其渺茫を加ふるが如き感がある。

六

津輕最上其他の炭燒藤太が、遠く西海の濱から巡歷して來たことは、最初より之を疑ふことを得なかつたが、然らば何人が何樣の意趣に基いて、此話を運搬してあるいたかに就ては、解答は今以て容易で無い。自分が試に揭げた一箇の推定は、所謂金賣吉次を以て祖師と爲し、理想的人物と仰いだ居た一派の團體、卽ち金屬の賣買を渡世とした旅行者の群に、特に歌詞に巧なりと云ふ長處

があつて、之に由つて若干生計の便宜を、計つて居たのでは無いかと云ふに在つたが、現存の資料は必ずしも之を助けるのみで無い上に、全體に亙つて世上の忘却が甚だしく、年代の雲霧は頗る我々の回顧を遮るものがある。尙辛抱强い後の人の研究に、委付するの他は無いのである。

この自分の想像の第一の手掛りは、加賀の芋掘藤五郎の傳說であつた。野田の大乘寺の西田圃に在る二子塚を、藤五郎夫婦の墓と稱して、寛政九年には記念の石塔を建て、近年は又之を市中の伏見寺に移したのみならず、金澤市史には之を富樫次郎忠頼の事だと迄謂つて居る。卽ち津輕と同じやうに、大半はもう歷史化して居るので、最早口碑とも謂はれぬか知れぬが、而もその黃金發見の顚末に至つては、全然豐後の小五郎と異なる所が無いので、之を土地の人かぎりの賞翫に委ねて置くわけには行かぬのである。藤五郎芋を掘つて、細々の煙を立つる賤が伏屋に、太和初瀨の長者の娘、觀世音の御示しに由ると稱して押掛け嫁にやつて來る。長者の名を生玉右近萬信と謂ふのは、或は又滿能では無いだらうか。姫の名は和五と謂ふとある。和五は和子であつて單にお孃さまも同じことだ。藤五郎は芋を掘る處の土が皆黃金であるのに、それが寶であることをちつとも知らなかつた。或時父の右近が贈つた一包の砂金を以て、田に居る雁に打付けて還つて來た。妻女の注意を受けて始めて山に入り、莫大の黃金を持還つて、それを近くの金洗澤で洗つた。金澤の名も之より起り、兼六公園の泉の水は卽ち其故迹である。遠州濱松の近くにも、藤五郎とは謂はぬが、やはり一人の芋掘長者が居た。奈良の某長者の信心深い娘が、遙々と嫁に來てから一朝にして長者になつた。鴨江寺の觀世音は芋掘長者の一建立で、附近には尙黃金千抔朱千杯の噂もある。鴨江と謂ふからには、鴨の話も有つたのであ

らうが、書いたものには遺つて居らぬ。紀州の湯淺に近い小鶴谷の芋掘長者、是は正しく廣川に遊ぶ鷗に、小判を打付けて居るところを、多くの人に見られた。何で其樣な勿體ないことをするかと戒められると、うちの芋畑にこんな物なら、鍬で掻寄せる位あると謂つたので、其自慢から芋掘長者の字が出來たとは、少し六かし過ぎた說明である。此家の嫁は京から來た。隅櫓長者と謂ふのは角倉の聞き誤りか、信州園原の炭燒吉次も、京の角倉與一の遠祖であると傳へ、やはり炭から富を得た話の筋を引いて居る。但し此婦人の內助の功は傳はらず、只大さうな衣裳持ちで、山の屋形で土用干しをすると、淡路の海まで照りかゞやき、魚が捕れぬと云ふ苦情が來たなどゝ、花やかな語り草を殘し居るだけである。

芋掘りも一人で山中に入り、土に親しむ生活をして居るから、幸運ならば黃金を得たかも知れぬが、自分だけは此イモを鑄物師のイモであらうと考へて居た。卽ち炭を燒く者ともと同じ目的で、必ずしも世に疎く慾を知らぬ爲では無く、寧ろ現實の生活には滿足せぬ連中が、我境涯で夢想し得る最大限の福分、乃至は文字通りの過去黃金時代を、記憶し且つ語らざるを得なかつた結果が、自然に印象深く歌と爲り昔話と變じて、歲月の力に抵抗して來たのでは無いかと思つた。金賣吉次の黃金專門も、既に亦一つの空想であつた。あの頃に假に金賣りと云ふ職業があつたにしても、それは後世の金屋と同樣に、タヽラの助けに由つて有利に古金類を買集め得る者を除く外、さういふ旅行者は想像することが出來ぬ。吉次の遺迹と云ふ地が京都平泉、奧州路の宿驛附近の他に、最上苅田の山奧の鑛山にも、庄內會津越後などの山村にも、下野の國府の近くにも、下總印旛沼の畔にも、武藏の片田舍にもあれば、京から西の安藝の豐田郡

に迄分散して、兩立せざる色々の記念を留めて居ることは、卽ち彼自身が運搬自在なる假想の人物であつた一つの證據で、更に推測を進めて見れば、中古實在の鑄物師に、吉を名乘に用ゐた人の多かつたことゝ、何ぞの關係があるやうにも思はれる。

金屋の旅行生活は、一方諸國に刀鍛冶の名工が輩出し、鏡や色々の佛具の技藝が著しく進んだ後まで、尙持續して居たやうである。地方の需要に應じて製品の輸送の煩しさを省くの利はあつたが、原料の蒐集が甚だしく不定な爲に、生產を擴張することは六かしかつたので、便宜を得る每に土著を心掛けたらしく、近畿の諸國を始として、中部日本には金屋と稱する小部落が多く、其住民が以前漂泊者であつたことは、彼等が忘れた場合にも尙證據がある。源三位頼政禁中に怪鳥を退治した時、仰を蒙つて百八箇の金燈鑢を鑄て奉り、功を以て諸役免許の官符を賜はつたと謂ふ類の由緒書は、些少の變化を以て殆ど之を持傳へざる家も無く、何れも只の百姓から轉業したものとは考へられて居らぬ上に、尙鎌倉時代の東寺文書にも、金屋等が此大寺の保護の下に、五畿七道に往反して鍋釜以下、打鐵鋤鍬の類より、更にその序を以て布米などをも賣買し、利潤の一部を寺へ年貢に備進して居たことが、明瞭に見えて居る。甑が廢れて鍋釜の弘く行はるゝに至つて、彼等の大半は鐵の鑄物師と爲り、鑄懸と稱する一派の小民は、亦其中から次第に分れて、銅工が地方の需要に據つて、諸國の空閑に定住の地を求めて後も、依然として遷移の生活を續けて居た。所謂イカケの天秤棒の、無暗に細長く突出して居たことは、卽ち近江美濃等の多くの金屋村の文書に、「兼て又海道鞭打三尺二寸は、馬の吻料たるべし云々」とあるのと、必ず其根原を一にするものであつて、是亦此種の鑄物師の、久しく自由な

る旅人であつた一つの證據である。

鋤鍬其他の打物類も、もとは兼て鑄物師の受扱ふ所であつた。鑄物師も鍛冶も等しく金屋と呼ばれ、金屋神は其の共同の守護神であつた。東海道の金谷驛は古くからの地名で、金谷の長者一人娘を水神に取られ、金を湯にして池に注いだと云ふ口碑なども殘つて居て、卽ち亦一箇の金賣吉次かと思はれるが、後世此地の名產は矢の根だけであつた。釘鍛冶庖刀鍛冶などの手輕なる作業は、各自踏鞴を獨立し原料を別にする迄も無く、土地の工人の不自由勝ちな設備を以て、田舍の入用だけを充して居た痕跡は、今日の金物店にも殘つて居る。旅をしてあるけばまだ其以上に、臨時のホドも選定せねばならず、又燃料用の炭から燒いてかゝる必要もあつた。斯ういふ生活が遠國偏土に於ては、かなり久しく尙續いて居たのである。

七

例へば江戸周圍の平原の如きは、村が少ない爲か採鑛地が遠い故か、いつ迄も金屋の移動が止まなかつたやうである。尤も鍛冶屋の方だけは國境の山近くに、領主の保護を受けて二戸三戸づゝ、さびしく土著した者が農村の中にまじり、由緒は記憶し技藝は忘れてしまつて、後は普通の耕作者になつて居るが、鑄物師の部落は佐野の天明武藏の川口等、取續いて土著して居た者は至つて稀であつて、他の大部分の工人等の、地方の需要に應じて居た者は、空しく遺跡のみを殘留して、皆どこへか立去つてしまつた。現在武藏相模の中間の樹林地に、カナクソ塚などゝ云ふ名のある小さい塚の、附近から多量の鐵の滓を發掘するものが多いのは、何れも鐵の生產地とは關係無く、他に想像の下しやうも

無い彼等の仕事場である。又カネ塚又はカナイ塚と稱して、小さな封土の無數に在るのも、或は之を庚申の祭場に托する人もあるが、他の府縣に在るカネイ場と云ふ地名と共に、是も金を鑄る者の假住の地であつたらしい。彼等は單に在來の塚に據つて、露宿の便宜を求めたのか。仕事の必要から時として自ら之を搆へたか。はた又別に信仰上の動機でもあつたものか。之を決定することはまだ六かしいが、兎に角に是が塚の名になつて殘るのには、單に稍長い滯留のみで無く、或期間を隔てゝ繰返し、同じ場處に訪ひ寄ること、富山の藥屋や奥州のテンバのやうな、習性があつたことを想像せしめる。殊に金吹きの勞作には、人の手を多く要した。今のイカケ屋のやうな小ぢんまりとした道具では旅は出來なかつた。猿蓑集の附合の中に、

押合うて寢ては又立つかり枕

たゝらの雲のまだ赤き空

とあるのは、恐らくは貞享頃までの、武藏野あたりの普通の光景であつて、或は妻子老幼をも伴うた物々しいカラバン姿が、相應に強い印象を村の人に與へた結果では無いかと思ふ。

タヽラと云ふ地名も亦無數に殘つて居る。此徒は燃料の豐富なる供給を要とした他に、尙水邊に就てその臨時の工場を開設せねばならぬ事情が有つたと見えて、沼池の岸、淵川の上などに、タヽラと呼ばるゝ地があつて前代の金屋の事業を語り、さうで無くても鐵の滓を掘出すものが多く、しかも其主はもう行方を知らぬのである。水の神が鐵を怖れると云ふ話、或はそれと反對に、釣鐘其他の金屬の器を、極度に愛惜すると云ふ物語は、踏鞴(たたら)師の殊に重きを置くべき言傳へであるが、今は一般の俗間に弘く分布して居るのも、何ぞの因緣らし

く考へられる。炭燒藤太が將に運勢の絶頂に辿り付かんとするとき、必ず水鳥遊ぶ水の邊を過ぎて、天下の至寶を無益の礫に打たずんば止まなかつたのは、所謂隴畝に生を送つた單純な人々には、寧ろ聊か皮肉に失したる一空想であつた。或は此話が金を好むこと彼等に越えた者の、草枕の宵曉に靜かな水の面を眺めつゝ、屢想ひ起し語り傳へた昔の奇談であつたとしても、尙今一段と丁寧なる說明、例へば其鳥は神佛の化する所にして、夫婦を導いて新なる發見の端緒を得せしめたと云ふ類の、信心の奇特などを附加へる必要があつたかと思ふが、旅の金屋は亦之を爲すにも適して居たやうである。關東地方に於けるカナイ塚の築造、殊に其保存と尊敬は、或はまだ宗敎的の起原を證するに足らぬかも知れぬが、次第に北に進んで下野の山村に入れば、金井神若くは家內神社などゝ書く神が著しく多くなり、福島宮城山形の三縣に於ては、其數が更に加は

つて、その或ものは鍛冶鑄物師の筋を引く家に、由緒を以て祭られ、他の大部分は普通の村に、只の祠となつて祭られて居る。卽ち此徒の第二の業體、若くは少くとも旅行の補助手段が、斯う云ふ特殊の信仰の宣傳であつたことは、これでもう疑が無いのである。中部日本の金屋の神は、今は唯霜月八日の吹革祭に、近所の小兒たちが蜜柑を拾ひに參加するだけであるが、海南屋久島などに行けば、鍛冶屋神は村中から信ぜられて居た。白齒のうちに身持ちになる女があれば、此神に賽錢を納めて鐵滓を申請け來り、此に唐竹と柳との葉を加へ、煎じて其婦人に飲ましめる。魔性蛇體などの種ならば忽ちに下りてしまひ、人の子であれば何の障も無いと謂つたさうである。屋久では此神を槖籥神、又は金山大明神と呼ぶと謂ふが、他の島々ではどうであらうか。中國地方の鐵產地に於ては、多くの村に金鑄護又は金屋子といふ祠あり。金屋旣に去つて後も、

神のみは留まり、此も學問ある神官に由つて、金山彦命などゝ屆けられて居るが、人は依然として之をカナイゴサンと稱へるのである。備後の双三郡に行はるゝバンコ節は俚謠集にも出て居る。曾てタヽラの作業の折に歌つたものが、遺つて昔を語るのである。

たゝら打ちたや、此ふろやぶへ
鹽と御幣で、淨めておいて
いはひこめたや、かないごじんを

山脈を隔てゝ出雲の大原郡にも、又別種のタヽラ歌がある。

ヤーむらげ樣がナーよければナー
炭燒さまもよけれ
イヤコノ世なるでナ
その金が金性がよいわ

ムラゲは鎔爐のことであるらしい。炭燒も爰ではもう祭られる神であつた。

八

金屋が神と其舊傳とを奉じて、久しく漂泊して居た種族であるとしても、彼等と宇佐の大神との因緣は、此だけではまだ見出されないのである。又眞野長者を中心とした連環の物語が、其の不文の記錄から出たと云ふことも單に一箇の推測であつて、炭燒の一條が果して最初より是と不可分のものであつた否かには疑がある。自分はたゞ此ほど奇拔にして且つ複雜な話が、此ほどの類似を以て各地に偶發することは無いと信じ、何人かゞ運搬してあるいたとすれば、それは炭燒の業と最も親しかつた者が、古く信仰と共に或地方から持つて出た

ので、之を豐後とすれば比較的鍔目が合ふやうに思ふだけである。但しまだま
だ解きにくい難題がいくらもある。

例へば芋掘藤五郎の、イモは鑄物師と見てもよいが、奥州三戸郡の是川村に
は、蕪燒笹四郎と爲つて同じ奇談が、路の行く手のヤチの鴨に、花嫁の二分金
を打付けることから、後に發見した大判小判を洗ふこと迄、あとは大抵其まゝ
で傳はつて居る。親の讓りのたつた一枚の畠地から、朝夕蕪ばかりを掘つて來
て、燒いて食つて居たと云ふ點だけが違つて居る。遠くかけ離れて肥後の菊池
の米原長者、是も名前が薦編みの孫三郎であつたのと、鳥が白鷺であつた點を
除けば、長谷の觀世音の夢の告げと云ふことまで、符節を合したる小五郎であ
つた。黄金發見者の職業は只何と無く少し替へて見たのかも知らぬが、肝要な
點である爲に看過することが出來ぬ。尤も肥後方では程遠からぬ玉名郡の立願

寺村に、匹石野長者の舊記があつて、恰も中間の飛石を爲しては居る。此長者
は貧しい炭燒別當であつた。花嫁は内裏の姫君、同じく觀世音の御夢想に由つ
て、女房十二人侍四人を從へて堂々として押掛けたまふ。但し此には水鳥は飛
立つこと無く、青年は只一つの石塊をツチロとして、其炭薦を編んで居たとあ
る。其ツチロは何處から持つて來たかと問ふと、斯樣なる石塊は此山中に何程
もあり、炭燒が家では水石踏石まで皆此なりと答へ、乃ちそれが黄金であつた
と謂ふ。此長者は早く退轉して、長者屋敷には瓦や礎が殘り、又例の糠の峰小
豆塚等の遺迹の他に、金蕊塚と稱して鐵滓多く出る塚もあつた。鐵の滓が出た
だけでは、之を以て黄金發見者の實在を證することが出來ぬ次第であるが、よ
く似た話は羽前の寶澤村にも有つて、藤太の相續人が建てたと云ふ石寶山藤太
寺は、是も炭燒男の語として、こんな石が三國の寶であるなら、私が山屋敷で

は藁打つ石まで、みんな此石だと謂つたのに基くと傳へて居る。偶然の一致では無かつたやうである。而も炭燒が薦を編んだ、藁を打つたと云ふことも、よく考へて見ると仔細があるらしい。卽ち單に炭を包む爲だけに斯んな物を作つたのでは無く、金屋は一般に其製品の輸送に付て、特に薦を大切にしたかと思ふ。江州長村の鑄物師の神は、豐滿明神と稱へて其音は宇佐の御伯母神に近いが、もと高野より移りたまふと傳へて居る。其時此地の米を獻上し、十符の菅薦を二つに切つて下された。今に至る迄其由緒を以て、鑄物師は五符の薦を以て包むと云ふ。其意味はまだよく分らぬが、荷造りにも作法のあつたことを謂ふのであらう。江戸深川の釜屋堀の鑄物師は、上總の五井の大宮神社に、十月十五日を以て始まる祭市と古い關係があつた。當日の神事のツク舞の柱に、高く結附けられる徑八尺の麻布の球は、必ず鍋釜を包裝する藁の殘りを納めて、其心につめたと云ふ話がある。此ばかりの材料から推測をするのは大膽であるが、宇佐神宮の以前の御正體が、黃金であつたと謂ひ、薦を以て之を包んだと謂ふ神秘なる古傳は、卽ち亦薦編みの孫三郎が、後終に米原長者と耀くべき宿緣を、豫め說明して居たものかとも考へられるのである。

孫三郎も小五郎も、畢竟するに常人下賤の俗稱である。此物語の盛に行はれた時代には、家々にそんな名の下人が多く使はれて居た。それ程の者でも長者になつたと云ふ變轉の面白味もあつたか知らぬが、尙大人彌五郎などの旁例を考へ合せると、特に八幡神の眷屬として、其名が似つかはしい事情があつたやうに感ずる。併し其點までは今は深入りせぬことにしよう。炭燒男の名としては既に列擧した藤次藤太の外に、尙阿波の糠の丸長者の傳說に伴うて、攝津大阪には炭燒友藏が住んで居た。長者の一人娘は父に死別れて後、家の守護神な

る白鼠に教へられ、遙々海を越えて尋ねて來て嫁となる。奇妙に光る石塊を井戸傍に出て洗つて見て、是が黄金ですかと謂つた若者が、曾てあの大阪に住んで居たと謂ふのは、今更の滑稽である。

大隅鹿屋(かのや)郷大窪村の山で、かねを發見したと云ふ觀音信者の炭燒は、初の名が五郎藏であつた。炭は暖い國に來るほど、段々と不用になる。故にもう是が日本の炭燒長者の、南の端であつても不思議は無いのだが、佐多の島泊(しまどまり)の山に新たなる意外が起らんとしつゝある如く、更に又波濤の千海里を隔てゝ、世にも知られぬ寂寞たる長者が住んで居た。宮古の島の炭燒太良(すみやきたら)は卽ち是であつて、事は本文に既に詳かに述べてあるが、自分が爰に問題として見たい唯一つの點は、冬も單衣ですむやうな常綠の島に在つて、尙且つ炭を燒きつゝ終に長者と爲ることが、信じ得べき物語であつた根本の理由である。

九

宮古群島の金屬の由來に關しては、現に二通りの古傳を存して居る。其一つは首邑平良(ひらら)の船立御嶽に屬するもので、昔久米島の某按司の娘、兄嫁の讒に由つて父に疎まれ、海上に追放されて兄と共に此地に漂著したが、かねこ世の主に嫁して九人の男子を產み、後に其子どもに扶けられて老いたる父を故郷の島に訪れた。父は先非を悔いて親子の愛を盡し、還るに臨みて鐵と其技藝の傳書を以て、引出物として娘に取らせた。其兄は之に由つて初めて鍛冶の工みを仕出し、ヘラカマ等を作つて島人の耕作を助けた故に、永く其恩澤を仰いで、兄妹の遺骨を此御嶽に納めたと謂ふのである。今は主として船路の安泰を禱るやうになつたが、男神をカネドノ、女神をシラコニヤスツカサと唱へて、其功績

を記念して居る。第二には伊良部の島の長山御嶽、此はもう祭は絶えたらしいが、やはり神の名はカネドノであつた。鐵を持渡り候故にカネドノと唱へ申候とある。大和からの漂流人で、久しく此地に住んで農具を打調へて村人に與へた。仍て作物の神として其大和人を祭るのだと傳へて居る。鐵渡來前の島の農業は、牛馬の骨などを以て土地を掘り、功程はかどらず不作の年が多かつた。それが新たなる農具の助によつて五穀豊かに生産し、渡世安樂になつたとあるのは、多分は現實の歴史であらう。荒れたる草の菴の炭燒太良が、忽ちにして威望隆々たる嘉播仁屋となつたのを、ユリと稱する穀靈の助けなりとする迄には、其背後に潜んで居た蹈鞴の魅力が、殊に偉大であつたことを認めねばならぬが、しかも鐵無き此島に鐵を持込んだ人々は、謙遜にも自分の功勞は之を說立てず、炭燒奇瑞の古物語を、そつと殘して置いて又次の或島へ、いつの間に

か渡つて往つてしまつたのである。

宮古の炭燒長者は、島最初の歴史上の人物、仲宗根豐見親が六代の祖と傳へられる。之を事實としても西暦十四世紀の人である。沖繩本島に於てもちやうど其の少し前に、鐵器輸入のあつたことが、半ば物語化して語り傳へられて居る。察度王が未だ其志を得ずして、浦添城西の村に詫しく住んで居た時、勝連按司の姫夙く英風に傾倒して、往いて之にかしづくこと、政子の賴朝に於けるが如くであつた。王の假屋形は庭にも垣根にも、無數の黄金白銀が恰も瓦石の如く、雨ざらしになつて轉がつて居た。それを新奥方が注意しても、笑うて顧みなかつたと傳へられる。其後鐵を滿載した日本の船が、牧港に入つて繫つた時に、察度は乃ち右の金銀をもつて、殘らず其鐵を買取り、農具を製作して島人に頒ち與へ、一朝にして人心を收攬したと謂ふのは、興味ある傳說では無い

ウズミビラ、木製の農具
マミクと云ふ硬い木で作る

か。琉球の史家が此記事に由つて、然らば我島にも昔は金銀を産したかと、有りさうにも無いことを想像して居るのは、寧ろ孤島の生活の淋しさを同情せしめる。島の文化史の時代區劃としては、鋤鍬の輸入は或は唐芋よりも重大であつた。所謂金宮の夢がたりを傭ひ來るに非ざれば、説明することも六かしい程の、何かの方便を盡して、兎に角に農具は改良せられた。單に鐵を載せた大和船の漂著だけでは、文明の進化は見ることを得なかつた筈である。然らば此島現在の金屬工藝には、何人が先づ參與したのか。言ひ換へれば久米島按司が、宮古の娘に與へた卷物は、最初如何なる船に由つて、南の島へは運ばれたのであるか。それはもう終古の謎である。今はたゞ僅かに殘つて居る釜細工の

舞の曲と、其行裝と歌の文句に由つて、彼等が旅人であり、物珍しい國から來たことを、窺ひ知るの他は無いやうになつた。江戸で女の兒が手毬の唄に、

遠から御出でたおいも屋さん
おいもは一升いくらです
三十五文でござります
もちつとまからかちやからかぽん

と謂ふのがあるが、之に附けても思ひ出される。斯う云ふ輕い道化は鑄物師たちが身上であつて、後に口拍子に眞似られたのではあるまいか。眞の芋賣りならば遠くからは來ない。所謂「取替へべえにしよ」の飴屋なども、潰れた雁首や剃刀の折れを、集めて持つて行くだけは古金買ひと聯絡があつた。併しもう忘れられようとして居る。此等に比べると沖繩の舞舞ひは、まだ明瞭なる由緒を

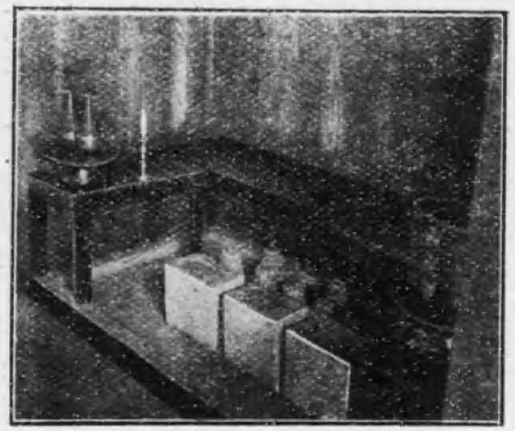
保ち、道具箱などは内地の鑄懸屋の通りであつた。或は流れ〳〵て金賣吉次の是も淪落の一つの姿であることを、推測しても差支へが無いのかも知らぬ。

水に乏しい南の島々では、黄金を鳥に擲つ話は既に聞くとが出來ぬ。しかも大なる清水に接近して、所謂カンヂャヤーの石小屋を見ることは多い。カンヂャヤーは固より鍛冶から出た語であらうが、沖繩では鍋釜其他一切の鑄物を扱ふ者を總括して斯う呼んで居る。自分は南山古城に近い屋古の嘉手志川、或は石垣島の白保などで、幾度か好事の情を以て其小屋を覗いて見たが、曾て工人の働いて居る者に出

屋古の嘉手志井の下殿
馬場の小屋はカンジヤヤー

逢はなかつた。恐くは村から村へ、今も僅かな人數が移りあるいて、淡い親しみを續けて居るのであらう。彼等が炭の由來と黄金發見の信仰に付て、現に如何なる記憶を有するかは、自分の之を知らんとすること、恰も渴する者の泉を想ふ如くである。琉球國舊記等の書に依れば、炭には木炭と輕炭の二種があつて、輕炭を俗に鍛冶炭とも曰ふ。大工廻村に炭燒勢頭地と謂ふ田地あつて、勢頭親部始めて之を製すと云ふ傳へあり。後世鄰邑の宇久田と共に、毎年二種各二百俵の炭を王廷に貢した。其年代は不幸にして既に明白で無いが、三山併合よりも古いことでは無ささうだ。

但し鍛冶以外の炭の用途も、勿論無かつたとは言はれぬ。島の神道に於ては火の神は卽ち家の神で、所謂御三物の地位は、内地の近世の竈神卽ち三寶荒神よりも、遙かに高く且つ重かつた。今は僅かに神檀の中央に、三塊の石の痕を



首里御殿の火神の三箇
各三つの石、前に置くは香爐

留むるのみであるが、以前は祖先の火を此中に活けて、根所の神聖を保存したものと思はれる。火鉢の御せぢ(筋)は恐くは之を意味し、火靈の相續は亦炭に由つて、爲し遂げられたかと想像する。此想像にして誤無くんば、冶鑄技術の輸入は、則ち火神信仰の第二次の興隆であつて、民に鋼鐵の器を頒ち賜ふが故に、其威德は愈旺盛となり、終に王家をして之に據つて、能く民族統一の偉業を完成せしめたのである。之に反して內地の軻遇都智神は、恩澤未だ洽からず、又雄族の之を支持するもの無く、天朝の傳承は寧ろ宣傳に不利なりし爲に、次第に其聲望を降して、終には炊屋の一隅に殘壘を保つに至つたが、是が果して東國九州の偏卑に住む民の信仰であり、殊には筑紫の竈門山の神などの、敎へ導きたまふ所のものと、一致して居つたか否かは問題である。而も此の如き地方的の大變化が、薪を一旦炭にしてから、再び之を利用する技術の有無に原因して居るとしたら、渉たる一個の小五郎の物語も、其の暗示する所は亦頗る重大である。

遠野物語の中には、深山無人の地に入つて、黃金の桶を見たと云ふ話があるが、其が火と關係あるか否はまだ確實で無い。併し少なくとも火神の本原が太陽であつたことだけは、日と火の聲の同じい點からでも之を推測し得るかと思ふ。日本には火山は多いが、我民族の火の始は、之に發したのでは無かつたらしい。天の大神の御子が別雷であつて、後再び空に還りたまふと云ふ山城の賀茂、又は播磨の目一箇の神の神話は、此國のプロメトイスが霹靂神であつたこ

とを示して居る。宇佐の舊傳が同じく玉依姫を說き、頻に又若宮の相續を重ずるは、本來天火の保存が信抑の中心を爲して居た結果では無かつたか。岩窟に火の御子を養育すれば、第一の御惠は必ず炭と爲つて現はれる。炭はまどろむ火であるが故に、之を奉じて各地に神裔を分つの風が先づ起り、金屬陶冶の術は則ち此に導かれたものでは無からうか。南太平洋の或民族、例へばタヒチの島人などの火渡りは、燃ゆる薪の中に石を燒いて、之を大きな竪坑に充たし、神系の貴族たちは列を作つて、其上を步むのであつた。日本に於ても大穴牟遲神の、手間の山の故事のやうに、赤くなる迄石を燒く習があつたとすれば、或種の重く堅い石が、猛火の中に滴り落ること、其石が凝つて再び色々の形を成すことは、所謂奥津彦奥津媛、卽ち炭火の管理に任じた者には、殊に遭遇しやすき實驗であつて、之を神威の不可思議と仰ぐは勿論、更に進んで其便益の大なるとを諒解した場合には、必ずや新たに無限の歌を賦して、火の神の恩德をたゝへんとしたことであらう。之を要するに炭燒小五郎の物語の起原が、もし自分の想像する如く、宇佐の大神の最も古い神話であつたとすれば、爰に始めて小倉の峰の菱形池の畔に、鍛冶の翁が神と顯れた理由もわかり、西に鄰した筑前竈門山の姫神が、八幡の御伯母君とまで信じ傳へられた事情が、稍明かになつて來るのである。所謂父無くして生れたまふ別雷の神の古傳は、至つて僅少の變化を以て、最も弘く國內に分布して居る。神話は本來各地方の信仰に根ざしたもので、其の互に相容れざる所あるは寧ろ自然であるにも拘らず、日を最高の女神とする神代の記錄の、此ほど大なる統一の力を以てするも、尙覆ひ盡すことを得なかつた一群の古い傳承が、特に火の精の相續に關して、今尙著しい一致を示して居ることは、果して何事を意味するのであらうか。播磨の古

風土記の一例に於て、父の御神を天目一箇命（あまのまひとつのみこと）と傳へて、乃ち鍛冶の祖神の名と同じであつたことは、恐くは此神話を大切に保存して居た階級が、昔の金屋であつたと認むべき一つの根據であらう。火の靈異に通じたる彼等は、日を以て火の根原とする思想と、いかづちと稱する若い勇ましい神が、最初の火を天より携へて、人間の最も貞淑なる者の手に、御渡しなされたと云ふ信仰を、持傳へ且つ流布せしむるに適して居たに相違ない。宇佐は決して此種の神話の獨占者では無かつたけれども、彼宮の神の火は何か隱れたる事情有つて、特に宏大なる恩澤を金屬工藝の徒に施した爲に、彼等をして永く其傳說を愛護せしむるに至つたので、炭燒長者が豐後で生れ、後に全國の旅をして多くの田舍に、假の遺跡を留めて置いてくれなかつたなら、獨り八幡神社の今日の盛況の、根本の理由が說明し難くなるのみで無く、我々の高祖の火の哲學は、永遠に不明に歸してしまつたかも知れない。然るに文字の記錄を唯一の史料として、上古の文明を究めんとする學者が、誤り欺き獨斷するに非ざれば、則ち絕望しなければならなかつた問題の眼目を、斯く安々と語つて聽かせ得る者が、隱れて草莽の間に住んで居た。さうして滿山の黃金が天下の至寶なることに心付かず、之を空しき礫に擲ちつゝ、孤獨貧窮の生を營んで居た。新しい學問の玉依姫は、今や訪ひ來つて彼が柴の戸を叩いて居るのである。

一〇

南の島々の金屬の始は、鑛物に豐かで無かつたばかりに、非常に我々の島よりはおくれて居た。それにも拘らずいつの間にか、炭燒長者は早ちやんと渡つて住んで居る。自分が本文の炭燒太良の話を書いて後、佐喜眞興英君は其祖母

から聽いたと云ふ、山原地方の炭燒の話を、南島說話に於て發表せられた。大體に於て宮古島の例とよく似て居て、此も亦女房の禍分が、二度目の夫を助けたことを說くらしいが、濱の寄木の神樣から、赤兒の運勢を洩れ聽くことゝ、鍋のヒスコを額に塗る風習を、說明しようとした部分は落ちてしまつて、其代りとして前の夫が、死んで竈の神と爲つた點を詳しく傳へて居る。沖繩と宮古と二處の話を重ね合はすれば、ちやうど琉球神道記の江州由良里の物語に近くなるから、或は之を以て慶長の初頃に、袋中上人一類の內地人から、聽いて記憶して居たものと見る者が有るか知らぬが、其では合點の行かぬ節々が少なく無い。殊に長者となるべかりし貧困なる第二の夫が、炭燒であつたと云ふ一條が沖繩と宮古とにはあつて、中世京都附近に行はれた物語には見えず、而も千里の海山を隔てた奧州の田舍で、現に口から耳へ傳承する話には、炭燒が又出て來るのは、如何にしても不思議である。

奧州方面の炭燒長者は、佐々木喜善君がその幾つもの例を採集して居る。今に書物になつて出るであらうが、さし當りの必要の爲に、二つだけ話の大筋を揭げて置く。一つは和賀郡に行はれて居るもの、他の一つは佐々木君の居村、上閉伊郡六角牛山の山口で、物知りの老女が記憶して居た話である。

(一) 木樵が二人山に泊つて同じ夢を見る。二人の家には男と女の兒が生れたが女の兒は鹽一升に盃一つ、男は米一升の家禍だと、山の神の御告げがあつたと思うて目がさめた。翌日還つて見ると果して子が生れて居る。成長の後夫婦となつて家が繁昌した。女房は一日に鹽を一升使ひ、盃には酒を絕さず、大氣で出入の人々に振舞をするので、小心の夫は之を見かね、離緣をしてしまふ。女房は出て行つたが、腹がへつたので大根畠に入つて大根を拔くと、其穴から酒

が涌き出たので、

ふる酒の香がする
泉の酒が涌くやら

と歌ひつゝ、女房は其酒を飲んで、元氣になつて行くうちに日が暮れる。山に迷つて一つ家の鍛冶屋に無理にとめてもらふ。翌朝見ると鍛冶場の何もかもが皆金である。それを主人に敎へて町へ持出し、賣つて長者になつたら、其あたりが町になつた。後に薪を背負うて賣りに來た父と子の木こりがあつた。それは女房の先の夫であつたと謂ふ。

（二）或鍛冶屋の女房、物使ひが荒くて弟子たちに迄惜しげ無く錢金を與へる。夫の鍛冶屋はこの女房を置いては、とても富貴にはなれぬと思うて、三つになる男の子をそへて離別する。女房は道に迷うて山に入込み、炭竈の煙を見つけ

て炭燒小屋に辿りつく。小屋のヒホド（爐）に小鍋が掛つて居る。主人が還つて來たから泊めてくれと謂ふと、今夜此飯を二人で食へばあすはもう食ふ物が無いと當惑するので、明日は又何とかしますと、それを二人でたべて寢る。翌日女房は懷から金を出して、これで米を買うて來て下され。そんな小石で何の米が買はれべ。インニエこれは小石で無い。小判と謂ふ寶物だ。こんな物が寶なら、をれが炭燒く竈のはたは、みんな小判だと謂つて笑ひながら、それでも買物に町へ出た。其あとで女房が往つて見ると、誠に炭竈のまはりには黃金が山のやうだ。之を運ぶと小屋が一杯になつて、入口から外へ溢れる。そこへ町から爺が還つて來る。一俵の米が殘り少なくなつて居るから、わけを聞くと途中で腹がへつたので、俵から米をつかんで食ひ〳〵來た。後からも人が附いて來るから、其人にも一つかみづゞ投げてやりながら來たと謂ふ。其人といふのは

自分の影法師のことであつた。さういふ風の人なれども女房はきらはず、次の日から其金で米を買ひ木こりや職人を呼んで、家倉小屋を數多く建てさせ、そこで炭燒長者と呼ばれるやうになると、其邊も村屋になつた。ところが先夫の鍛冶屋は女房を出してから、鎌を打たうとすれば鉈になり、鍬と思へば斧になる。けちが附いてろくな仕事も出來ないので、乞食になつてしまひに炭燒長者の門に來る。女房がそつと見ると元の夫であつたから、米三升をやつて無くなれば又來よと謂つて返す。それから長者の夫にも話して、共々にすゝめて下男にする。何も知らぬから悦んで、一生この炭燒長者の所で暮してしまふ。

同じ老女の話したうちには、右の二つの物語が一つに續いて居るのもある。挿話があつてあまり長いから抄錄をしなかつたが、それにも大根を拔いた穴から甘露のやうな酒が出て、之を賣つて自ら長者の女主となつたとあり、卽ち一方には田山小豆澤のダンブリ長者の話とつゞき、他の一方には三戸郡の蕪燒笹四郎の蕪を食べた話とも緣をひく。殊に面白いのは先夫に福分が無くて、藁に黃金を匿して、草履を作つて來いと謂つて渡すと、夜中に寒いので其藁を金と共に、ヒホド(爐)に燃してしまふ。握り飯の中に小判を入れて遣ると、歸りに沼に下りて居る鴨を見かけて、其むすびを投げつけてしまふ。女房はさて〳〵運の無い人だと歎息して、すゝめて我家の下男とする。さうして酒屋長者の家で一生を終ると云ふのである。但し此方では長者は獨身の女主で、黃金は發見せずに酒の泉を發見した。第一の話は後の夫が鍛冶屋、第二の話だけは炭燒であるが、やはり亦前の亭主を鍛冶屋にして居る。他の類例を集まる限り集めて見たら、必ず變化の中から一定の法則が、見出されることゝ信ずる。要するに話を愛した昔の人の心持は、一種精巧なる黃金の鏈の如きものであつた。

一一

歌の豐後の炭燒小五郎が妻は、容みにくしと雖都方の上臈であつた。弘い世間に夫と頼む人が無いので、日頃信仰の觀世音の靈示に從ひ、遙々と鄙の山賤を尋ねて來たと云ふのが、物語の最も濃厚な色彩を爲して居るが、是は所謂佛法の影響であつて、又中代の趣味であらう。信心深い男女の間の前世の約束と云ふ單簡な語で、省略してしまつた身の運家の幸福の說明は、話に此ほどの共通がある以上は、後に來つて附加はつたものとは考へられぬ。況や其背後にはどこ迄も、火の神の思想と古い慣習が、殆ど無意識に保存せられて居たのである。阿波の糠の丸長者の娘の嫁入には、觀音の代りを家の守り神の白鼠がつとめた。陸中の話では旅の六部に敎へられて、月の十五日の朝日の押開きに、九十九戸前の眞中の土藏の屋の棟を見ると、紫の直垂を着た小人の翁が三人で、旭の舞を舞うて居た。うつぎの弓に蓬の箭をはいで之を射ると、小人は眼又は膝を射られて忽然として消去り、それから家の運は傾いた。或は又路に三人の座敷ワラジかと思ふ美しい娘に逢ひ行く先をきくと、この山越えあの山越えて雉子の一聲の里へ行きますと、幸運の住家を敎へてくれる。それが宮古の島ではユリと稱する穀物の精と現れて、女性を炭燒の小屋に導くのである。沖繩本島に於ては又變じて雀(クラー)になつて居る。折目の祭の日に下男の言ふまゝに、新米で飯を炊いたのが惡いと謂つて、夫に追出された女房が、こゝに隱れかしこに遁げて去りかねて居ると、斯う謂つて雀は彼女を導いた。

クル、クル

クマネスダカラン(爰には住まはれぬ)

ヤンバルヤマカイ（山原山へ）
タンヤチグラカイ（炭燒のクラへ）

さうして炭燒の妻に爲つて、忽ち金持になつたのであるが、この古い古い公冶長系統の一節も、袋中上人所傳の外であつた。

第二に注意することは、炭燒を尋ねて來た女性に、別に一人の同行者があつた點である。宮古島の舊史には鄰婦を伴ひとあり、佐々木君の話の一つには下女を連れて行くとあるが、今一つの方では三つになる男の子を附けて離別したことになつて居る。或は又前の男が貧乏をしてから、其子をつれて薪を賣りに來たともある。何か仔細のあつたのが、もう忘れられたものと思はれる。佐喜眞君のおばあさんの話では、沖繩では女は妊娠の間に追出され、炭燒にとついでから男の子が生れたことになつて居る。零落の夫がもとの妻であることを知

らずに、笊を賣りに來ると長者の子供が彼に向つて惡戯をした。女房に向つて御宅の坊ちやまが、惡さをなされて困りますと謂ふと、今まで知らぬ顏をして居たのがもうたまらなくなつて、自分の子供まで見知らぬとは、何と云ふ馬鹿な人だと歎息したので、始めて昔の妻子かと心付き、其まゝひつくりかへつて死んでしまつたとある。此樣な何でも無いこと迄が、手近の琉球神道記とは似ないで、遠い雪國の村の話と、一致しようとして居るのは何故であらうか。

不思議はまだ是ばかりで無い。沖繩では斯うして耻ぢて死んだ男を、其まゝそこに埋めて、上に庭の飛石を置き、それから茶を飲む度に一杯づゝ、その石に灌いで手向にしたとある。其點が亦附いてまはつて居るのである。不運な前夫が知らずに來て、元の妻の世話になることは、何れの話も一樣であるが、奥州では單に勸められて下男に爲り、炭竈長者の家で一生を終つたとある。之に

反して江州由良の里では、箕作の翁は長者の臺所に來て食を乞ひ、別れた女の姿を見て耻と悔とに堪へず、忽ち竈の傍に倒れて死んだのを、後の夫に見せまい爲に、下人に命じて其まゝ竈の後に埋めさせた。それが此家の守り神と爲つたと謂ひ、それを竈神の由來と傳へて居る。清淨を重んずる家の火の信仰に、死を說き埋葬を說くのは奇怪であるが、越後奥羽の廣い地方に亙つて、醜い人の面を竈の側に置くことが、現在までの風習であるから、是には尙さう傳へらるべかりし、深い理由があつたのであらう。廣益俗說辯には何に由つたか知らぬが、三寶荒神の始は、近江甲賀郡由良の里、百姓の夫婦と其婢女と、三人を祀つて竈の神にしたと云ふ、別の傳承を載せて居る。由良は通例海邊の地名であるから、近江は誤で無いかとも思ふが、何か尙此方面に、人の靈を火の靈として崇拜する、昔の理由が隱れて居るやうにも思ふ。

若し此推測にして誤無くば、宮古の炭燒の話の發端に、二人生れた赤子の中で、女の方は額に鍋のヒスコを附けてあるから、一日に糧米七升の福分を與へ男の兒は其事が無かつたから乞食の運ときめたと、神々の談合が有つたと謂ひそれ故にこそ今に至る迄、生れ子の額には必ず鍋のヒスコを附ける也と、北の島々で宮參りの日に、紅で犬の字を描き、又は作り眉をするのと、よく似た風習を說明しようとして居るのは、是も同じく竈の神の信仰に基くもので、竈と炭との關係を考へ合せると、假令京都近くの書物に傳はつた話には見えなくとも、長者を炭燒とした話の方が、一段古い樣式であつたと考へてよろしい。

謠の蘆刈の元の型は、今昔と大和と二つの物語に見え、贈答の歌は既に拾遺集にも採擇せられて居る。それが純然たる作爲の文學で無かつたことは、大和物語に於ては前の夫が、上藺の姿を見知つて我身の淺ましさを耻ぢ、人の家に

遁げ入つて竈の後にかゞまり匿れたとあるのを見てもわかる。芦を苅つて露命を繋いだと謂ふのも、必ずしも「あしからじ」又「あしかりけり」の二つの歌が先づ成つて、これを能因法師の流義で難波の浦に持つて行つたと解することが出來ぬかと思ふのは、全然同種の近江の話に箕作の翁と謂ひ、沖繩に於ては笊を賣りに、奥州に於ては草履を賣りに、或はマダ木の皮を剝ぎ又は薪を苅つて、之を背負うて賣りに來たと謂ふのが、同じやうな詫しい姿を思はせ、事による と肥後の薦編みや蓆織り長者、羽前の藁打ち長者の因縁を引くかとも思はれる上に、更に偶合としては餘りに奇なることとは、豐後の内山附近にも蘆苅と云ふ部落があり、同じく臼杵の深田村では、小五郎の子孫と稱して蘆苅俊藏氏あり、更に同じ苗字が弘く宇佐地方に迄も及んで居ることである。曾て後藤喜間太君が寫して示された、豐後海部郡の花炭の由緒書には、小五郎七十八代の後裔草苅左衞門尉氏次の名を錄し、豐鐘善鳴錄には長門國にも、草苅氏と云ふ一門が分れて居たと記してある。所謂山路（さんろ）の草苅笛の故事を辿れば、蘆苅は寧ろ誤では無いかとも思つたが、現に之を名乘る舊家がある以上は、爭ふべき餘地が無い。更に進んで其舊傳を、究めて見たいものである。

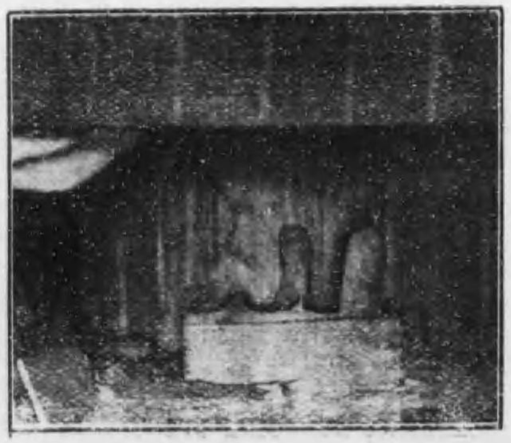
一二一

果しも無い穿鑿は、もうこの位で一旦中止せねばならぬ。他日若し幸ひに機會があつたら、宇佐の根原が男性の日の神であり、其最初の王子神が、賀茂大神同系の別雷であり、次の代の若宮が火の御子であり炭の神であつて、所謂鍛冶の翁は其神德の顯露であつたと云ふことの、果して證明し得べきや否やを究めて見たいと思ふ。現在の祠官たちの承認を得ることは難いが、八幡には今尙

闡明せられざる若干の神秘があるらしく、是は只その一端だけである。自分の試みは單に文字記錄以外の材料から、どの程度まで大昔の世の生活が、わかるであらうかと云ふ點にあつて、殊に奈良の京以後突如として大に盛になつた宇佐の信仰が、本來は南日本の海の隈島の陰に、散亂して住んで居た我々の祖先の、無數の孤立團體に共通した、至つて單純なる自然宗教から出たもので無いかどうかを知りたかつたのである。託宣集や愚童訓別本を見ると、宇佐の山上には最も神靈視せられた巨大なる三石があつた。火の神とは傳へて居らぬが、寒雪の中にも暖味ありといひ、又は金色の光を放つて王城の方をさすとも謂つて居る。而うして三箇の石は竈の最初の形であり、從つて火神の象徴であることは既に認められて居る。之に由つて所謂三寶荒神の思想も起つた。沖繩諸島に於ても御三物と稱して三石を火の神に祀つて居る。只未だ其起源に關しての

說を聽かぬが、三箇の略同じ大さと形の石が、引續いて海からゆり揚がる時は之を奇瑞として拜したやうである。この二つの信仰には恐くは脈絡があるであらう。卽ち南島の從兄弟たちは、未だ石凝姥天目一箇の恩澤に浴せざる以前から、我々とよく似た方式を以て、根所の火に仕へて居たのである。炭燒長者の話がいと容易に受入れられた所以である。

遺老說傳には與那覇親雲上鄭玖、或日未明に久米村から、首里の御所に朝せんとして、浮繩美御嶽の前を過ぎ、一老人の馬に炭二俵を積んで來るに逢うた。老人は强ひて玖をして家に引返さしめ且つ其炭俵を與へて去る。後に侍僮をして之を焚かしめやう



八重山石垣島蔵元の火の神
三つ石の一つが今折れて居る。

とするに、どうしても燒けず、よく見れば炭は悉く黄金であつたと謂ふ。信州園原の伏屋長者が半燒けの炭を神棚に上げて置くと、それが忽ちに金に化したと云ふのと、全く同日の談であつたが、黄金を産せぬ島では、殊に此不思議は大きかつたことゝ思ふ。卽ち干瀨の練絹を以て取圍んだ蓬萊山に在つても、父が炭燒藤太で無ければ、其子は金賣吉次であり得ないと云ふ理屈が、はつきりと其世の人の頭にはあつた。但し我々は今が今まで、もう之を忘れてしまつて居たのである。

阿遲摩佐の島

大正十年二月二十一日夜、久留米市中學明善校にて談話。此夕大に雪ふる。

一

十二年前に、一度私は此地を通つて矢部川の上流に遊び、冬野と云ふ村を經て、肥後の來民へ越えて行き、それから段々と南の國を廻つたことがあります。阿蘇の火山を中心とした中央部の山地にも、三方四方から入つて見まして、今尙鮮明なる色々の記念をもつて居ますが、今回は島々の旅から還つて來たのでありますが故に、御聽き下さるならば主として海の方の話をしたいと思ひます。鹿兒島ではあの頃ちやうど今の大みかどがまだ東宮に御いでになつて、海を巡

つて行啓を遊ばされたばかりの時でありました。縣の物産館に、其折獻上をした蒲葵の笠や團扇と同じ品が、記念の爲に陳列してあるのを見て、始めて私は舊日本の國土にも、此植物の在つたことに心付きました。さうして更に考へて見ると、山城の京の數百年の間、白く晒したビロウの葉を以て、美しい車を造り、之を牛に牽かせてあまたの貴人たちが、都大路や郊外の野山を、清少納言の所謂「のどやかに遣つて」居たので、勿論其原料の樹木が、國内の何れかの地に、成長して居たことを推測せねばならなかつたのでありました。飾抄と云ふ書物には、檳榔は前關白近衛殿の御領、鎭西志摩戸莊の土産なり。仍て所望して之を用ゐると有ります。志摩戸は卽ち今の島津家の名字の地で、大隅國の東の境、近世略して莊内と呼んで居た廣大なる莊園でありまして、現在は最早内陸の方には、此木は一本も無いやうでありますが、志布志の港町の前面、一里足

らず離れた海上に、大なる蒲葵島があつて、高く抽き出た若干の松を除く外、全山すべて蒲葵であります。現に獻上の笠扇の類も、此地の住民が淨まはつて製したものだと承りましたが、常から若干の住民が、今尙此職に携はつて居るのであります。

島津氏の所領は、中世以後次第に膨脹して、更に薩摩の西海岸に於て、幾つかの蒲葵ある島を包容しました。南から算へると秋目の港外に、優雅な姿をして立つ枇榔島、串木野村の海上十八町に在る羽島一名沖の島、阿久根の沖に在つて曾て藩主が鹿と都鳥とを放したと云ふ雌島一名桑島の如き、地誌や地圖に現れたものでも是だけあります。日向の東海岸にも、尙幾つかあるのです。就中宮崎の市から僅か南、折生迫に接した靑島は有名で、近頃は澤山の繪葉書も刊行せられ、汽車に乘つてみんなが見物に行く樣になりました。卽ち所望する

人が有るならば、都の檳榔毛の車の用ゐ料ぐらゐは、どこからでも之を採取することが出來たわけであります。而も此物を特に大隅の島津莊からばかり出すことに爲つたのは、全く輸送關係の變遷からでありまして、決して此地方以外に蒲葵を產する島が無かつた故ではありません。距離は遠方でも島津莊は至つて大きな莊園で、年貢や人の往來の爲に兵庫堺への船便の序がいくらも有り、近い處よりは却つて取寄せることが容易であつたらしいのです。

延喜式の時代には、まだビロウで飾つた車は流行しなかつたのですが、他に朝廷の御入用が有つて、九州では太宰府が、之を取揃へて貢進しました。卽ち民部省式の下に、檳榔の馬蓑六十領、同じく蠼蓑一百二十領とあるのがそれであります。車の代りに乘馬の飾りとして、賞玩せられたらしいのであります。太宰府は御承知の如く、九州二島を併せ支配して居りましたから、此も亦大隅薩摩などの島より取寄せたものとも想像し得られるか知れませんが、さう迄せずともずつと近くの海岸にも、處々に蒲葵は生長して居たのであります。それから又典藥寮の式には、太宰府より進する年料の雜藥十二種の內に、檳榔子二十斤と云ふのが見えます。是も多分蒲葵の實のことで、中世以後支那から輸入して香料藥用に供し、後には染物にも使はれたる本物の檳榔子とは、別の品であつたらうと考へます。蒲葵は元來檳榔とは全く別種でありまして、蒲葵をビロウと呼ぶのは混同の誤りかと思ひます。松村博士の植物名彙に依れば、蒲葵は Livistonia Chinensis Br. で支那の在來種、檳榔は Areca Catechu L. で輸入種だとあります。其檳榔は沖繩の島でも、首里の圓覺寺に二三本、傳來の知れたものがある位で、內地の方には成長せぬものであつたのに、始めて漢字を日本に持込んだ時代、うつかりと蒲葵の木に、檳榔の字をあてゝしまつたのです。

最も最初には、字音を以て之を呼んだので無く、別にアヂマサと云ふ語がありました。例へば檳榔之長穗宮と書いてアヂマサノナガホノミヤ、大山下狹井連檳榔と書いてサキノムラジアヂマサと唱へて居たのでありますが、次第に漢字に親しくなつて、牛車の行はれる頃には、大かたの者が之をビロウ毛の車と謂ふやうになり、從つて此木もさう呼ぶに至つたのと見えます。或は說を爲して、檳榔の字とは關係は無い。比閭といふ漢語の音を移したものであらうと謂ふ人があります。新井白石先生なども其一人であるかと思ひます。枇閭は又栟櫚とも書き、卽ち日本に多くある櫻櫚のことでありまして、檳榔などよりは遙かによく蒲葵と似て居り、支那でも折々之を混同した人があると申しますが、併し判別は決して六かしくありません。一方は葉がこはく幾筋にも分れてをり、蒲葵は柔かくて續いて居ます。柔かい故に笠や團扇にも造ることが出來るのです。又棕櫚には繩にするやうな丈夫な毛が有る代りに、葉は決して白く美しく晒すことが出來ませぬ。それに一方は隨分寒氣にも堪へて、中部以北の霜雪の中にも繁茂しますが、片方は南の海邊だけの物で、今迄我々でも知らなかつた位であります。花や實を見ても、其香氣を嗅いでも、又單に樹の形だけでも、見分けることは容易ですから、比閭と云ふやうな耳馴れぬ漢語を採用する餘地も無く、又ビロウをヒリョと呼ぶ人は無かつたやうで、結局は檳榔と云ふ異國情調の豐かな文字に絆されて、千年前の古人も尙誤を遺したものであります。

二

九州以外の國からも、所謂檳榔の葉は之を朝廷へ納めて居りました。同じく民部省式の次に諸國の年料別貢の雜物、伊豫國檳榔二百枚とあるなどが其證據

であります。伊豫には西南に暖かい島が多く、現在土佐に屬して居る沖島あたり迄、昔は其管轄であつたから、幾らも之を採取することが出來たとは思ふが、果して今のどの島に產したものか、實地を見ないから想像が付きませぬ。流布本の延喜式は此條に誤があつて、檳榔の櫛二百枚となつて居る爲に、色々無用な想像說も出たやうですが、櫛には何としても製しやうの無い植物で、全く是は榔の字の重複を櫛の字と見た誤解であり、二百枚の數は蒲葵の葉を算へたものであります。そんなら其葉は何の爲に御用になつたかと申すと、それも同じ記錄の內膳司式に、毎年の十一月、向ふ一箇年の料として請受くる檳榔葉二十八枚、內八枚は御飯を扇ぎ涼す料、他の二十枚は雜膳の火を扇ぐ料とあるなどが、其用途の一例でありました。禁中の御仕來りは些細な事でも、斯うして例條を定め置かれるほど、古風をよく守るものであるのに、どうして又御飯をさます扇までに、珍しい遠地の產物を御使ひなされたものであらうか。單純なる物好みとは私には考へられないのであります。或は尊い御方の御食物に當てる風は、特に蒲葵の葉より生ずる風で無ければならぬ、道理があつたのでは無いか。伊勢の齋宮でも毎年御座所の料として、此葉を二枚づゝ乞ひ請けて居られたと言ふのを見れば、或は何かもう忘れてしまつた特殊の事情が、あつたのかも知れぬと思ひました。尤も蒲葵の扇は今でも人がほしがるやうに、しやれたものでもあれば調寶な物でもありました。紙の不自由な時代には、之を扇にしようとするのは自然であります。故に只の人も之を使つて居たとは、繪卷物などに折々現れて居ります。今日南支南洋からみやげに持つて還る團扇とは形がまるで違つては居ましたが、以前は山伏修驗者も必ず之を携へて居ました。而も日常の家具としてゞは無く、峰入の時には必ず腰にさし護摩の節には此で

火を起す。言はゞ一種の信仰上のシムボルであつて、其名も陰陽道に因んで簸箕扇と謂つて居たのは、勿論蒲葵扇の音に由つたものであります。國史大辭典の修驗道の條には、其蒲葵扇の繪が出て居ます。支那で仙人や隱者が手に持つ團扇とは、まるで形のかはつた、頭が小さく且つ三角なものであります。其昔內膳の司に於て用ゐられた蒲葵の葉も、果して此と同じ形であつたかどうかは知らず、とにかくに扇に編んで使つたことだけは疑がありませぬ。

延喜式の出來た時よりもずつと前、光仁天皇の御代しろしめす寶龜八年の五月に、渤海國の使節史都蒙等蕃に歸るに臨みて、かの國王に書を賜はり、海石榴油一缶、檳榔の扇十枚等を、請に任せて贈り賜はつたとあるのが、多分は記錄に此物の名の顯れた初度であります。御承知と思ひますが渤海は高句麗の遺種で、長白山の北麓から、今の浦潮斯德豆滿江の邊までを版圖として、獨立して居た一國でありますが、當時强大なる契丹に仲を遮られ、南出して支那の文明に接觸することが出來ず、艱難の船路を越えて遙々と我朝に誼を求め、前後百六七十年の間も、參り通うて居たのであります。而して雪深き彼等の本國に於て、海のこなたの緣の島をゆかしがつたことは、一つには又珍しい南方の產物が、望のまゝに給與せられた爲かとも思はれます。卽ち渤海王朝の人々に取つては、我が一群のやまとの島々が、やはり所謂「阿遲麼佐の島も見ゆ」であつたらしいのであります。

三

私は尙進んで、この蒲葵と云ふ植物が、現在どの邊まで分布して居るかを知

らうとしました。薩摩の西海岸のビロウ島のことは前に申しましたが、それから北に進んで肥後の八代郡にも、檳榔島といふ島がありました。八代城から西三里餘に在り、渡海の船の風濤を避くるもの、多く來り泊するを以て一に著島とも謂ふ。蒲葵の木多く、神まし〳〵て此を採ることを惜みたまふ。又虻多し。寶暦の頃より薩摩の土人、往々にして來り盗むと、肥後國志には書いてあります。かの隣國人が聽いたならば、必ず抗議すべき記事でありまして、私もそんな必要は無かつたやうに思ひます。不知火灣の沿海には、其後段々の埋立新田が出來て、此島も今は内陸につゞいてしまつたやうでありまして、兎に角に此木の繁茂して居る島は、暫くあの邊を旅行して見ましたが、終に心付かずにしまひました。それから有明海島原半島の沖などには、有るかも知れませぬがまだ聞いて居りませぬ。併し肥前には古風土記の松浦郡値嘉郷、小近大近島の條に產物として檳榔を擧げて居ります。卽ち昔から既に知られて居たのであります。五島の中には亦一つの枇榔島のあることが、日本實測錄には見えてゐますが、地圖で搜してもまだわかりません。近年出來た「平戸しるべ」と云ふ本に、アコウ・ビロウ・ヘゴ・チカラシバなどの亞熱帶植物が健全に成育するとありますから、今でもどこかには在るのです。貝原氏の大和本草にも、肥前平戸に蒲葵多し、對馬にてゴハと謂ふとあります。朝鮮全羅の多島海にも檳榔嶼或は蒲葵嶼と名くる小島が二つまで地圖の上に見えますから、それより緯度の低い對馬にあるのも不思議ではありませぬ。それよりも珍しいのはゴハと云ふ名稱が飛んで此邊の島にあることです。ゴハは事によるとコバの聽き誤りかも知れませぬ。沖繩縣の諸島では、到る處蒲葵をクバと稱し、ビロウと云ふ語を知らぬのでありまして、大隅日向の南端にも、尙コバと謂ふ名詞が殘つて居ます。今の

沖繩語ではォ列は悉くウ列に發音し、現に書いた物には多くコバと爲つてゐますから、勿論一つの語であります。或はがば〳〵といふ葉の音から出た名稱かも知れませぬ。而も京都の文人たちも、全然コバと云ふ語を知らなかつたわけでも無いのに、どうして又誤つたるビロウの方に移つてしまひましたか。今の若い人が英語を口にすると同樣な、輕々しい風流心にでも歸する他はありませぬ。赤染衞門の歌の集に、人の許にコハの有るを一つ乞ふに惜みければ、出したるまゝに取りて還りて、云々とあつて「盜むともこは憎くからぬことゝ知れ」と云ふ歌があります。伊勢貞丈は右の大和本草の記事を引いて、コハは卽ち蒲葵である。車の飾などの用途の爲に、京都に取寄せて貯へて居たものを、一枚だけ所望したのであらうと謂つて居ます。さすれば沖繩の島言葉が、後に此方へ移つたものとは、愈〻推定しにくゝなるのでありまして、注意して居たならば地名か何かになつて、尙內地にも痕を留めて居ることが、見出され得るかも知れませぬ。

本土の海岸で此植物の成長するのは、現在の私の知識に於ては、紀州が北の限であります。紀伊國續風土記の物產の部に、蒲葵ビロウ、在田郡處々に產す北地には絕えて無しとあります。小野蘭山の享和二年春の日記にも、湯淺の町に近い廣村の八幡宮の社地に、巨大なる蒲葵の一本を見た記事があつて、是は確かであります。和泉には何處かに此樹があるといふことが、白石手簡の中には謂つてあるが、此方は噂ばかりで、まだ實跡を得ませぬ。併し必ずしも空な話で無いことは、大昔仁德天皇の淡路島行幸の折に、御眺望に入つた阿遲摩佐の島が、是より遠からぬ海上に在つたと云ふ一事からでも認められるのです。近世に右の御製の註釋をした橘守部（たちばなのもりべ）は、斯う云ふことを書いて居ります。大阪

の商人で淡路島の産と云ふ蒲葵の葉を賣つて居る者があつたので、其店に就て問合せて見たところが、實は淡路の近傍に一島蒲葵のみを生ずる小島がある。其島から持つて來るのだが、世間の人が普く知らぬ島だから、假に淡路からと謂つて賣ると答へた。多分は其島が大昔のアヂマサの島であらうと謂つてあります。其在り所がはつきりとせぬ限り、何とも云ふことは出來ませぬが、兎に角に近い頃まで瀬戸内海の東部に此樣な島があつたものかと思ひます。現在はもう跡形が無くても、それで此話を疑ふわけには行きませぬ。保安林の制度が定められた前、一時盛に島の木は伐られました。名ばかりビロウ島と稱して其木の絶えた島が、既に幾つかあるのです。土佐の西南幡多郡柏島(かしはじま)から一海里ほど沖に、地圖にもビロウ島とある岩山があります。土州淵岳志には之を蒲扇島と記し、地方(ぢかた)の人民が舟で渡つて蒲葵の葉を採り來り、笠に縫ひて賣買する。地は狹くして漁民も住み得ず、全島殆ど他の植物が無いと謂つて居ますが、其は悉く昔の事實で、前年私の友人關口健一郎君が、行政裁判所から臨檢に往つて來ての話には、ビロウは今はもう三本しか無い。全島到る處岩菅(いはすげ)の大きな株が繁茂し、俗にカツヲ鳥と稱する大水凪鳥(おほみづなぎどり)が、無數に其陰毎に子を育てゝ居るのを見たと云ふとでありました。同じ書物の中には此植物、土佐には此島より外に無しとありますが、それも亦信じられませぬ。現に此國の內地に屬する地名にも、蒲葵と云ふところがありました。斯うして考へて行くと、ビロウ卽ちコバは我々の祖先の生活と、遙かに今よりも親しかつたこと、其が次第に都近くから消えたのは、寧ろ餘りに之を賞用した爲であつて、天然は必ずしも其成長分布を妨げて居たので無く、只幾分か繁殖の條件が南の方よりは惡かつた結果此の如く需要に追付かなくなつた迄だと云ふことが、漸く明かになるやうに思

はれます。所謂檳榔毛の輿や車は、蒲葵の葉が手に入らぬ場合には、菅の葉を以て之に代へたさうであります。菅は素より京畿以北の日本に、盛に茂つて居た水草ですから、蓑や笠には之を用ゐてよかつたのですが、それにしても笠を作ることを縫ふと謂つたのは、菅と云ふ草から始まつた語とは思はれません。伊勢の神宮の御田植の神事か何かに、必ず蒲葵の笠を著て居た例があると云ふことを、白井教授から承つたことがありますが、後にはどう變化して居るものか、尋ねて見たいと思つてまだ其儘になつて居ます。伊勢には限らず國々の社の神態（かみわざ）には、昔は笠が大へん重要な裝束の一つでありました。其笠がもと何物で縫はれてあつたかは、我々の信仰の由來を究める爲に、至つて大切なる問題であります。次には中世の流行であるにしても、車を蒲葵の葉で葺き又は飾ると云ふ風習は、つきも無く卒然として始まるべきものでありません。是にも何か今一つ前の代から、其根さしに爲つた古い生活の樣式があつたのであります まいか。古事記の垂仁天皇御宇の條に本牟智和氣（ほむちわけ）御子（みこ）出雲國に到り、檳榔之長穗宮に坐すとある記事は、凡そ三つの場合を想像させます。卽ち當時はあの國の海にも蒲葵島があつたか。さうで無ければ大分の遠方から、此葉をたてまつらしめて、兎に角に御假宮はアヂマサを以て葺き且つ圍はれてあつたか。或は又其宮を斯く稱へるだけの別の理由、例へば菅などを以て白々と、美しく淸らに屋根を蔽うて、人をして永く此植物の名を記憶せしめたので無いかと考へます。何れにしても葦原の中つ國に、久しく住み著いて後までも、コバは尙我民族に屬した樹木であつたのであります。

四

大正二年の春郷土研究と云ふ雑誌に、私は此の蒲葵島の話をざつと書いて、如何にして蒲葵が古くから日本の土地に分布して居たかを考へて見ようとしました。それには此木の形がいかにも南洋くさく、我邦のやうな高い緯度には似付かぬやうに思はれたことゝ、其從兄弟の棕櫚なるものが中世以後の歸化種であるらしいことから、稍一種の豫斷を作つて居たかも知れませぬが、兎に角に豐後水道の兩側の島々、或は朝鮮半島の一端から五島平戸甑島(こしきじま)の内側にかけての一列と、何れも略南北線の上に連つて居るのを見て、是は春秋の渡り鳥が種子を運搬するのでは無いかと推測しました。海沿ひの地の溫度濕度が特に繁殖の條件であるならば、島と相對した内陸にも有るべき筈なのに、獨り人住まぬ

靜かな島だけに此物を見るのは、無心無感覺の運搬者では無いだらうと考へたのであります。殊に此推測を强めてくれたのは、天野信景の隨筆鹽尻の記事でありました。同書(帝國書院本)卷五十三にはこんな事が書いてあります。日向の海にビロウ島がある。毎年朝鮮の方から鵯(ひよどり)千萬と無く渡り來つてビロウの實を食ふ。其後鷹曇りと稱して、何日か續いて薄雲の空を蔽ふことがある。土地の人たち鷹來るべしと謂ふに、必ず鷹多く韓地より飛び渡る云々。日向の人から聽いたらしい話で作り事とは考へられず、又東部日本に於ても、椋鳥鶫(つぐみ)などの來る路と期日とは一定して居りまして、從つて食料などの約束も不變ですから、今まで蒲葵の無かつた遠方の島にも、いつかは此種を運んで繁茂せしめることが有つたらうと、考へて見たのであります。

ところが久しからずして、此說の弱點は露れ始めました。先づ第一著には本

多林學博士が、蒲葵の實は大きくて、とても鵜には食へないと申されました。實は最近まで、私はビロウの實は見たことが無かつたので、この專門家の横槍には頗る閉口いたし、且はつく〴〵と書齋の學問の、しようも無いものであることを感じました。そこで今回の南日本の旅には、最初から團子(だんご)聟(むこ)のをどけ話のやうに、ビロウの實コバの實と口癖に唱へながら、島々を經廻つたのであります。さうすると第二に行き當つたことは、蒲葵の分布が兼ての想像よりも、ずつと廣かつたと云ふ廉であります。卽ち紀州の湯淺邊にもちやんと古木の蒲葵がありました。又人の住む島にもやはり立派に成長して居ました。豐後の姫島にもあると云ふことを敎へてくれた船乘りがありましたが、それは自分で見たのではありませぬ。同じ國の中浦半島、卽ち鶴見崎の鼻を南へかはりますと眼の先に沖の黑島が現れ、そこにはもう此木がありました。それから下入津(しもにふづ)の村を横斷して蒲江(かまえ)の港に出れば、海上四里ばかりに深島と云ふ島があり、日向へ行く船は其近くを走ります。此には住民も二十何戸、蒲葵林の傍に小學校の分敎場まであるのです。日向でも靑島から南には處々に此木を見かけます。油津を船で乘出すと、少し行つて築島(つきしま)と云ふ島は、やはり小さな部落があり、土藏の白壁に蒲葵の綠の影が搖いて、ちよつと珍しい風情を見せて居りました。此對岸は南那珂郡市木村の山地ですが、僅かながら處々に蒲葵が生えて居るさうです。靑島の如く保護せられて居らぬ爲に次第に無くなると申します。現に近頃の共進會にも、根付きのまゝ出品するやうに、郡長が勸誘を受けたけれども、入費が高くつくので中止したとも聞きました。都井(とゐ)の岬の御崎神社は野生の蘇鐵を天然記念物として保存して居ますが、蒲葵はもと無かつたやうです。それを新たに築島から移植しようと試みて、思ふ通りに根を下さなかつた、半

枯れの木を幾つか見ました。併し今暫くすれば、爰も一つの蒲葵の名所となるかも知れませぬ。大隅半島に入つて見ると、島で無くても蒲葵は多く、殊に神社の境内には、必ずと謂つてもよい位です。佐多の岬の御崎神社は、島津家で尊崇せられた航海の保護神でありますが、社頭には蘇鐵よりも蒲葵が多く、其の見事なる老木を以て靈境を取圍み、私が參詣した十二月晦日には、よく熟した實はあまた落ちこぼれ、又去年の實から若芽を抽き出して居ました。此社の信仰に於ては、みだりに之を採ることを禁じて居るやうであります。其代りには岬の前面に小さな一つのビロウ島があつて、土地は燈臺に屬して居ますが、村の者の葉を採ることを大目に見てゐます。年にざつと三百圓ほどの物で、下駄の鼻緒や笠などを造つて賣ると云ふ話でありました。

私はこの九州の南の端まで往つて、漸く氣付いたことが三つありました。一つにはいくら土地の人の謂ふことでも、一から十まで其儘は信じられぬこと、殊に彼等が知らぬと云ふのを、直ちに無いとは解すべからざることです。例へば私が試みに此木の名を問ふと、ビロウと答へてコバとは謂はないと明言した者が、少し間を置いて此葉は何に使ふと聞いたら、コバ笠を作るのだと謂ひました。斯んな經驗は沖繩の方でも何度か有つた。多くの人は忘れたと云ふことを忘れて居るものであります。第二には此植物の用途が、南日本の田舎に於ても思ひの外弘くして、屢々繁殖が間に合はぬらしいことであります。從つて今は少しも無い地方にも、昔から蒲葵が成長しなかつたと思ふことは、誤りの斷定を導く虞があります。第三に蒲葵が我邦に固有であつたことは確かとしても、どれが野生でどれが養殖であるかの差別は、さう容易には立てられぬことであります。ちがつた言現はしをするならば、コバの樹の分布に就ては、鵜などよ

りも遙かに貴く且つ靈ある者が、其運搬及び保護に參與して居たらしいことであります。此點は南の島々を巡つて、愈々之を確かめましたが、南九州の各地に於ても、今日蒲葵の存在する場處は、若干の人家邸内を除きましては、他は殆ど皆神の社の地であります。佐多でも御崎神社の他に、大字郡の神社などは殊に大木の林を爲して居ます。路傍の小さき社にも一本二本が眼に著きます。他の地方で申せば、前に擧げた肥後八代の著島を始め、薩州秋目の蒲葵島も戸柱大明神と稱して祇園を祀り、六月十五日が祭日であります。日向の青島にも權現の社あり、彦火々出見尊と仰がれてゐます。殊に著しいのは大隅志布志の沖の島です。港の石垣に凭つて眺めると、手に取るばかり鮮かに見えますが、島には蚋や蚊が多いと謂つて、稼ぎに行く者の他は常には渡つて見ませぬ。島の頂上に檳榔御前、或は飛瀧權現とも書いてある姫神の社があつて、正月申の

日には行つて祭りました。天智天皇の御女乙姫宮、御母は玉依姫と傳へて居ますが、元祿の初年には瀨多尾權現の別當小野寺の相模坊、島津殿の代參として此島に祈を籠め、三略書と云ふ一卷を天狗から直傳したと云ふ話もあつて、恐ろしい神樣であります。恐くは笠團扇の原料を採りに行く人々も、深い信心と約束とを以て、漸くのことで之を許されて居たのでありましよう。社は建てゝなくとも其他の島々でも、蒲葵は只徒らに繁茂して居たのでは無いやうです。

五

それから立戻つて、果して鵜が蒲葵の實を食ふかの問題でありますが、成るほど是は些し六かしいことになります。私は處々で此實を採集し、具さに考察して見ましたが、色も形も略食卓のオリーブ位のもので、大きさから言へば櫧

の實ほどですが、あれは容易に二つに割れるに反して、此方は棗などの如く、中に大きく堅い核がある。かけ離れた島まで携へるのには、鳥は一旦之を嚥下せねばならぬわけですが、それは鵜には望みにくいと思ひました。併しそれでも尙懲りずに、逢ふ人ごとに色々の形で此事を尋ねました。例へば磯山の中腹或は灌木の林にまじつて、ぽつんと一本の蒲葵がある。あれは誰かゞ栽ゑたのか。いゝや生えたのぢや。併し近くに親木も無いのに、どうして種が落ちるかね。大かた鳥ぢやらう。斯う云ふ問答をしたこともあります。又或人は鴉が蘇鐵の實をくはへて飛んで行くのを見たと敎へてくれました。菴美大島は本年は蘇鐵の實の收獲の年で、どこへ行つても累々として蘇鐵の林が美しく、殊に此話を何度も聞きました。鴉は黑いもの蘇鐵の實は丹色ですから至つて目につくのです。是と鵜のピロウの實と、何も關係が無いやうですが、蘇鐵の實はほゞ二錢銅貨大で、厚みがあの四倍ほどあり、大よそ同じ比例である上に、中の核の硬く大きいとも一樣です。故に若し鹽尻の記事が、日向の人のうそで無かつたら、食べる以上は外の地へも持つて行くだらうと思はれますが、只私が遙々と大海を越えて、熱帶の島からでも來るやうに想像したのは、根據の無いとでありました。さうすると結論は斯うなります。蒲葵は南九州ほどの溫度には、本來相應せぬものゝやうに見えるが、實際は始めから日本國の木であつた。但し人の入用が多い爲に、屢ゝ根絕する虞があつたのを、幸に神の森に保存せられて居り、又或力がそれを意外の地にも運び、意外な繁殖を見ることもあつたらしい。而して敬虔なる昔の人が、我々とは別樣な態度を以て、其事實を觀察して居たかと思ふことは、此から尙少しく考へて見ようとするのであります。

鹿兒島灣を船で橫ぎりますと、大隅半島の西岸では大根占村の民家に、始め

てよく成長した蒲葵の木が、高く聳えて居るのを見かけます。南するに從つて次第に多く、何れもよく耕された畠の畔か、さうで無ければ人の垣根の中であつて、其他は皆神地のみであります。さうして只の家でも此木の無いものは皆其葉をほしがつて居ります。佐多から戻つて來る時に、私の荷物を背負つてくれた女なども、其序に伊座敷の親類を訪ねると謂つて、手土産とも言はれないビロウの葉を十枚ばかり、鞄の上へがばん〳〵と結はへ附けました。野生とは申してもちやうど今日の京都附近で、松茸を保護する程度の人爲が加はつて居ます。法律が之を顧みぬ代りに、神樣が世話をして下されます。不思議なことには沖繩本島に渡つても、事情は正に之と同じやうでありました。ビロウの團扇は琉球から來たと謂ひ、若くは少なくとも其製法を彼に學んだと思ふ者が多い位だから、南だけに此木も澤山有ることゝ思つて居ますと、やはり舊家らしい

沖繩のコバの木、後の森は御嶽

人の庭に、庭木として大切に育てゝ居るものゝ外は、殆ど皆御嶽の茂みの中に在るばかりで、寧ろ此木を遠く望んで乃ち御嶽なることを知ると云ふ有樣でありました。奄美大島と佳計呂麻の島では、それが一層少なくなつて居ります。村の屋敷にも神社にも、探してやつと見付ける程しかありませぬ。是は此島の信仰に稍近世の變化があつたことゝ、同時に生活の促迫が一段と切であつたことに、歸しても誤が無からうと思ひました。大島と薩摩との間に棊布して居る所謂道の島々に於ても、やはり蒲葵は今將に種を絶たんとして居るやうであります。孤島の飢饉と云ふものは、我々が

想像にも及ばぬ怖ろしいもので、殊に此方面には近年野鼠の害が多く、此獸が繁殖した年は、有る限の青い物を食ひ盡さねば止まぬこと、大陸の蝗の害に似て居ります。そんな場合には人も亦爭うて野生の草木を採つて食ふのです。神の杜の森嚴を以て、盜伐を制止し得たと云ふのは寧ろ哀れであります。三國名勝圖會卷二十八に、黑島の黑尾大明神、御神體は大小の石十三。社の山には蒲葵多し。土人は神木として其落葉をも取らず。同じ島管尾大明神、或は黑島大明神とも謂ふ。海岸に接し蒲葵多し。土人神木として伐り取ることを禁ず。昔は此木山中諸處に多かりしが、皆伐り盡して神山の外殘す所無しとあります。之に鄰する竹島、俊寛を祭つて居る硫黃島、其他の沖の小島に於ても、事情は似たものゝやうに思はれます。此地誌が出來てから、又百年になりなんとして居ます。假に其後の變遷に由つて、今は早一本も影を止めず、渡り鳥は徒らに往來するやうになつてしまつて居るとしても、私は些しも之を怪しまぬのでありますが、事實は恐くはまだ此記事の通りでありましよう。

六

コバの木の分布と保存に、神が參與して御出でることを知る爲には、どうしても沖繩の島々を見てあるかなければなりませぬ。もとは異國の如く考へられた此島の神道は、實は支那からの影響は至つて尠なく、佛法は尙以て之に對して無勢力でありました。我々が大切に思ふ大和島根の今日の信仰から、中代の政治や文學の與へた感化と變動とを除き去つて見たならば、斯うもあつたらうかと思ふ節々が、色々あの島には保存せられてあります。必要なる片端だけを列擧しますならば、先づ第一には女性ばかりが、御祭に仕へて居たことであり

ます。家の神が一族の神となり、次第に里の神地方の大神と、成長なされたらしきことであります。巫女を通じての神託に依つて、神の御本意と時々の御心持とを理解し、之に基いて信心をしたことであります。神の御名は神御自らが託宣を以て之を顯したまひ、從つて割據の時世に於ては、御嶽毎に各異なる神が出現なされ、諏訪八幡の如き勸請分靈の沙汰の無かつたことであります。八百萬と申して居ながら、古事記日本書紀の神代卷に由つて、神の御名を訂正しようとするが如き、企ての無かつたことであります。神は御祭の折のみに降りたまふものと信じて居たことであります。神を社殿の中に御住ませ申さず、大和の三輪の山と同じやうに、天然の靈域を御嶽として尊敬して居たことであります。

其上に尙神人と人神との差別が、明白に有りました。すぐれた人は死して祭られて、神と同じ尊さに上りますが、其他に尙最初から神であつた神が、人に憑いて年毎に此世に出現なされました。而して其出現の場處を、神自らが選定なされたもの、それが卽ち御嶽であるのです。現今の沖繩人は、ウタキ(御嶽)とウガン(拜所)は同じ物だと、誰に訊ねても答へますが、私は尙疑をもつて居ります。事によると山の神又海の神が、御降り成されると云ふ考へ方が、世を經て漸くうとくなり、內地と同じやうに、次第に二種の神靈を差別せぬやうになつた結果、人を葬つた一個の塚、人の建てた一基の石塔をも、御嶽と呼んでもよいことに爲つたのでは無からうか。卽ち前代に於ては、拜所と謂へばすべての靈場で、其內の空より降り沖より寄りたまふ神の祭場、卽ち琉球神道記に所謂拜林だけを、取分けて御嶽と稱へたのでは無いかと思つて居ます。沖繩で一番大きく且つ大切な齋場御嶽なども、域內は一町歩以上もあつて、其中には五つも六つも拜所が分れてあります。其の一々の石又は岩窟を、更にウタキと

は呼び得ないものゝやうであります。

御嶽は必しも我々が此文字に由つて想像する如き高山の頂ではありませぬ。寧ろ多くの場合には里に接した僅かの丘、又は平地の林でありますが、隙間も無く草木が茂り、其内景は神秘であります。普通は前面の空地に石の香爐を置き、そこを拜所又は祭場にして居り、林の中へは入込む徑も無いかの如く見えますが、祭の日にはノロ(祝女)カミンチュ(神人)などの婦人のみが式法に遵うて此に出入し、神を御迎へ申して來たと謂ひますから、尙林の奥にも一定の結構があつたものと思はれます。祭に仕へる者の詞をオタカベと謂ひ、之に答へたまふ神の御詞をミセセリと申します。其中に屢々繰返されたオウタモト、シキタモトと云ふ語は、卽ち中央の祭壇と外側の祭壇とを意味して居るのかと考へます。宮古八重山の二主島、又は大島の二三の村に於ては、御嶽の構造が少し

く沖繩の本島と異なり、外の入口に鳥居に似た門があり、普通の拜所が其内に在ります爲に、我々は稍立入つて中の樣子を窺ひ知ることが出來ました。靈場の中央は更に又珊瑚礁の石を以て、一區を劃してあつて、之をオブと謂つて居ります。僅かの地積ながら樹木深く、極めて屈曲して細路が付いて居ます。八重山の宮良村で、處々の御嶽を案内してくれましたのは、前盛某と云ふ最も順良な青年でありましたが、オブの中へ入らぬは勿論、其正面に立つことをさへも避けました。理由を尋ねると、只どうしてもさうする氣になれぬと、しほらしくも答へました。宮古の方では此内陣の門は、干瀬の石を斫つて造つ

八重山名蘭御嶽のウブ
拜をするはツカサ、そよぐはコバの葉

た高さ二尺程のもので、這はなければ入られぬやうに最初から出來て居ます。併し強ひて見ようとすれば、中の樣子は石垣越しに樹の間からでも見られるのです。學問の爲憚る所無く申すならば、其細い徑の行き止りに、何か樹木があつてそれが屢々コバであります。樹下には形の尋常で無い海石を、置いてあることがあります。正面僅かばかりの地には、清淨の砂が布いてありまして、其上にマガリと謂ふ素朴な土器を置き、或は二尺もある琿璞の貝が、仰向けにしてあることがあり、さうして又香爐があります。香爐の一點を除けば、他は悉くコドリングトンの、メラネシヤ誌に在る寫眞などゝ同じでありました。

七

沖繩本島の神の林の奥に於ても、蒲葵は亦往々にして、先島同樣の重要な地位を、占めて居たのでは無かつたか。是が私の今抱いて居る想像であります。其想像を强めしめる材料は、第一には御嶽の名であります。單にコバ森コバの嶽と呼ぶものは、恰も蒲葵あつて蒲葵島と謂ふに同じく、在來の地名に依つたものとも思はれますが、それにも久高島のコバウの森のやうに、神がコバの種を蒔かしめたまひし口碑あるものがあります。眞壁のコバ森の神にコバウの御イベ、西原間切翁長のコバの嶽にコバッサカリノ御イベを祭るの類は、決して偶然の名とは見られませぬ。又兼城の安波根にはコバモトの嶽、宜野灣の安仁屋にはコバックリヨリアゲ森があります。洵り揚げと云ふ御嶽は多く渚に臨んだ靈地で、海がもたらしたる奇瑞の石を、齋くものかと思はれます。常に前兆と啓示とに基いて、祭典を經營した民族に在つては、稍普通で無い樹と石との行動は、すべて皆神の言語として受容れられたのです。數あるコバウ嶽の中で

も、山北今歸仁のコバウの嶽は、殊に神山でありました。昔君眞物の出現せんとする時には、謝名のアフリノハナ(天降岬)に赤日傘が立てば、此御嶽には黄なる日傘が、彼に黄色なるものが立てば、此御嶽には赤いのが立つたと傳へて居ります。其日傘と云ふものも、紙の無い時代には、必ずコバの葉であつたらうと思ひます。

次に見逃すことの出來ぬのは、嶽々の神の御名であります。康熙五十二年卽ち日本の正德三年に、王命を奉じて編纂した琉球國由來記には、傳ふる限の御嶽の神名を錄してありまして、其十八年後に成つた琉球國記附錄は、之を不精確に漢字に書改めたものです。もと御嶽の神は、村々の巫女が顯しまつりしもので、次の託言を以て改められる迄、敬虔に最初の御名を守り傳へた筈ですから、地方的に變化をして居てもよいのですが、事實は里を隔てゝ相似たる御名の神が多く、略之を六七種に分類することが出來ます。中に就て最も多いのは蒲葵に因む神名であつて、六百足らずの御嶽に在つて、八十ばかりがそれであります。殊にコバツカサノ御イベとあるのが、又其大部分を占めて居ります。イベは琉球の神道に於て、最も概念を得にくい古語であります。或は我々の諱といふものと語原を同じくし、卽ち猥りに口にすべからざることを意味するかとも思ひますが、八重山諸島では御嶽毎に、必ず神の名と威部の名と、二つづつ有るのが不思議です。ツカサは略我々の用ゐ方と同じで、高い位置を謂ふらしく、今も巫女のことをさう呼ぶ地方があります。

コバノツカサと對立して、次に多い神の御名は、イシラコ及びマシラコの御威部であります。是は石に依りたまふ御神かと思はれます。浪と嵐の次の朝などに、ゆくりなく海の岸に見出した石體に由つて、神々の御出現を知つたと

云ふ例は、大倭の舊記にも幾つか有りますが、沖繩ではそれがまだ現在の信仰の一部を爲して居ます。多くの靈石は今尙神の御座であります。神の御名之に基くものとしますれば、コバッカサの方の由來も推し測ることが出來るのです。神が二柱ある場合には、他の一座をマネッカサの御威部と稱へ、具志川間切宇堅村のコバウノ嶽、同じく宮里村のコバノカタ嶽、勝連間切濱比嘉村の久場島の御嶽の如きは、共に一つある神をマネサッカノオイベと唱へてゐます。マネは其根であつて、コバの同事異稱かとも思ひますが、伊波君などは明白に、それはコバによく似たクロッグと云ふ植物だと申されます。

御嶽成立に關する古い傳承の中からも、蒲葵の繁茂が神意に由ると解せられた痕跡を見出すことが困難でありません。例へば南風原間切宮平村の善繩御嶽の如きは、もと善繩大屋子と云ふ人の屋敷でありました。此人或日我謝の海邊

に出でゝ魚捕る柵を見廻る時、一つの龜を見付けた。そこへ一人の女性現れ來つて、龜を大屋子の背に負はせ、家に持ち還らしめたところ、龜途中に於て大屋子の首に嚙み付き、其傷に由つて大屋子は死んだ。葬送の後三日にして其墓所を往つて見ると、大屋子の亡骸が無い。之を不思議と驚いて居ますと、乃ち空中に聲あつて大屋子は死んだのでは無い、ギライカナイに參つたのだと呼ばはります。神託ならんと思つて居るうちに、忽ちにして彼の屋敷に薄マネコバ生ひ立つに由りて、御嶽として祭つたと申します。ギライカナイは又ニライカナイとも謂ひまして、海のあなた天の外の、神々の御住國であります。沖繩人の Valhalla であります。此薄マネコバを琉球國舊記の文には、薄草及野葡萄と漢譯して居りますが、どうしても信ずることは出來ませぬ。

それよりも今一層適切な例は、久高島に於ける穀物起源の傳說であります。

昔此島の根人アナゴの子なる者、伊敷の泊に出でゝ海原を眺めて居ると、白い壺が一つ濱近く浮び寄る。取揚げんとすれども取られず、そこで家に歸つて妻のアナゴの姥に事の由を語れば、女房は行水して身を清め、白いものを著て濱に出で、袖をひろげて迎へると、壺はたやすく流れ寄つて、其袖にすくはれました。家に還つて之を開いて見れば、中には麥粟黍遍豆の種の外に、尙コバとアザカシキョとの種子が入つて居ました。此等の種を處々に播いて、生ひ立つたのを見ると食べ物でありました。コバとアサカシキョとは二三年してから生えました。人に踏ませぬやうに大切にして居るうち、コバは高く秀でアサカシキョは茂り、其頃君眞物出現してたびゝ此山に託遊なされた。誠に神遊の處と見えたり、念願を祈りければ驗ありそれより御嶽と崇め始むとあります。神秘の壺も之を土中に埋め、石を積み廻らして後々までありました。之を掘り出さうとして病を得、死んだ者もあつたと申します。由來記には之を久高島の二つの御嶽、中森とコバウの森との由來として載錄して居るのでありますが、どちらが白い壺の中の種から始まつた森であるか、甚だ精確でありませぬ。只コバウの森の條下に、此森阿麻美久作りたまふと也とあるだけであります。アサカシキョは草の名でありますが、和語の何に當るか、說明してくれる人がありませんでした。只所謂森の下草として、隙間も無く茂つて居ると云ふことを謂つた人があります。

阿麻美久は此島最初の御神としてあります。久高の靈地と相對する知念の齋場御嶽、王城百名村の藪薩の嶽、それから北では今歸仁の城內上の嶽の如き、何れも阿摩美久の作りたまふと云ふ口碑がありますが、是は單に起源が極端に古いと云ふを意味するの他は無かつたかも知れませぬ。而も八重山の島などで